溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅲ

2017

加古川市教育委員会

溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅲ

2017

加古川市教育委員会

写真１　調査地全景（北西から）

巻頭図版 2

写真 2　溝 3・溝 6（南から）

写真 3 溝 3・溝 6 土層断面（北東から）

写真 4　水田跡 1（北から）

写真 5　水田跡 1　足跡検出（西から）

序　　文

加古川市は、播磨平野の東部を流れる一級河川加古川の中下流に位置し、原始･古代から多くの人々が暮らす豊かな地域です。発掘調査を行うと、その確かな歩みの跡が地中から姿を現します。

このたび作成しました本報告書は、加古川下流域を代表する溝之口遺跡の発掘調査報告書です。

溝之口遺跡は、市内でも有数の大規模集落遺跡で、これまでも開発に伴う多くの調査が実施されてきました。開発で遺跡に影響のある範囲だけを調査するため、ひとつひとつの調査はそれほど多くの情報を伝えてくれませんが､それらを少しずつ積み重ねることによって､徐々に遺跡の全体像がわかって来ています。

今回の報告も、遺跡全体からするとごくわずかな範囲での調査報告ですが、溝之口遺跡を解明するための手掛かりがまた一つ蓄積されたと考えております。

本書の刊行が、市民の方々にとって郷土の歴史・文化を理解する資料として、また文化財保護へのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査実施及び報告書作成にあたり、多大なご協力をいただきました株式会社サンコー土地建物様、地元住民の方々をはじめ関係各位のご理解ご協力をいただきました。ここに厚くお礼申しあげます。

平成 29 年 12 月

加古川市教育委員会
教育長　田渕博之

例　　言

・本書は、兵庫県加古川市加古川町溝之口37番２、37番３、37番５～７、39番、40番１に計画された宅地造成工事に先立ち実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である溝之口遺跡に含まれる。

・発掘調査及び整理作業、報告書刊行までに要した経費は、事業主である株式会社サンコー土地建物に多大なるご協力をいただきました。記して感謝いたします。

・発掘調査は、平成28（2016）年１月13日から同年２月８日まで行った。整理作業及び報告書作成は、平成28（2016）年４月12日に開始し、平成29（2017）年12月28日の報告書刊行をもって終了した。

・本調査は、加古川市教育委員会が主体となって実施し、事業主より委託を受けた有限会社松浦興業の協力を得た。本書刊行時の調査組織は下記のとおりである。

教育長	田渕博之
教育指導部長	大西隆博
教育指導部調整担当部長	井部浩司
文化財調査研究センター所長	沼田好博
文化財調査研究センター副所長	宮本佳典
文化財調査研究センター庶務担当係長	安田啓一郎
文化財調査研究センター庶務担当職員	藤原典子
文化財調査研究センター学芸員	山中リュウ（調査担当）
文化財調査研究センター学芸員	淺井達也
文化財調査研究センター学芸員	平尾英希
文化財調査研究センター埋蔵文化財専門員	西岡巧次

・遺物の水洗・注記・接合・復元・実測・採拓・実測図トレース及び遺構図トレースは、有限会社松浦興業が実施した。

・遺物の集計は、加古川市整理作業員　窪田美佳、佐藤　薫、前川博子が行った。

・遺物観察表の作成は、加古川市整理作業員　園原悠斗、吉村慎太郎（両名とも立命館大学大学院）が行った。

・遺構写真の整理は、加古川市整理作業員　井上かおりが行った。

・本書に掲載の遺構写真は山中が撮影し、遺物写真は有限会社松浦興業　桐山智義氏が撮影した。

・本書の執筆・編集は山中が担当した。

・本調査において得られた諸資料・出土遺物は、加古川市教育委員会が保管・管理している。

・発掘調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々や諸機関からご指導、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

上田健太郎　岡本一士　永惠陽子　深江英憲　森内秀造　山本　誠
東溝之口町内会　兵庫県教育委員会　間形町内会

凡　　例

・本文中ならびに挿図中における標高は、東京湾平均海面（T.P）を用いた。また、遺構全体図中の座標値は、世界測地系（第Ⅴ系）に基づき、作図段階で設定したものである。
・上記の座標を基準とし、調査区全域に５m間隔のグリッドを設定した。
・本書に掲載の遺構番号は、発掘調査時に付した通し番号（例：01号遺構、02号遺構・・・）と、整理作業の段階で抽出した遺構に新たに付した遺構種別毎の番号（例：溝１（08号遺構）、水田跡１（10号遺構）・・・）がある。
・本書中の挿図の縮尺は、遺構図は1/40を基本とし、遺物実測図は1/4を基本とした。上記と縮尺が異なる場合は個別に明示した。
・遺構図における線種・線号は以下のとおりである。
　調査区（実線・0.4㎜）、遺構の上端（実線・0.3㎜）、遺構の中端（実線・0.2㎜）、
　遺構の下端（実線・0.1㎜）、攪乱（一点鎖線・0.1㎜）、復元線・隠れ線（破線）
・本書に掲載の遺物実測図は、出土した遺構にかかわらず通し番号を付している。
・遺物実測図中の線種は、外形線・中心線・区画線は実線、稜線は破線で示した。また、須恵器の断面は黒塗りで表現している。
・本文中や遺物観察表における遺物の器種名は、「壺」「甕」などの簡易な表現とし、「○○形土器」という表現は用いていない。
・土層説明のうち、炭化物等の混入物については、「多量」「中量」「少量」「微量」に分け、「粘性」「締まり」については、「強い」「あり」「やや弱い」「弱い」に分けて記載した。
・土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所『新版標準土色帖』（2014年版）に準じた。
・遺構一覧表・遺物観察表の計測値で用いている「＊」は推定値、「＞」は現存値を表す。

目　　次

巻頭図版
序文
例言・凡例
目次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　第１節　遺跡の位置 …… 1
　第２節　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第３節　遺跡の環境 …… 2

第Ⅱ章　遺構と遺物 …… 11
　第１節　概要 …… 11
　第２節　基本層序 …… 11
　第３節　弥生時代の遺構と遺物 …… 15
　第４節　古墳時代の遺構と遺物 …… 23
　第５節　古代の遺構と遺物 …… 26

第Ⅲ章　まとめ …… 30

図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　溝之口遺跡の位置 …… 3
第２図　調査地点の位置 …… 5
第３図　調査地点周辺の旧地形 …… 5
第４図　調査地点周辺の遺跡 …… 6
第５図　基本層序観察地点 …… 11
第６図　基本層序・水田跡１断面図 …… 12
第７図　遺構配置図 …… 13
第８図　溝１　平面及び断面図 …… 15
第９図　溝１　出土遺物 …… 16
第10図　溝２　平面及び断面図 …… 17
第11図　溝２　出土遺物 …… 17
第12図　溝３　出土遺物 …… 18
第13図　溝３・溝６　平面及び断面図 …… 19
第14図　溝４　平面及び断面図 …… 20
第15図　溝４　出土遺物 …… 20
第16図　水田跡１　出土遺物 …… 21
第17図　水田跡１　平面図 …… 22
第18図　溝５　平面及び断面図 …… 23
第19図　溝５　出土遺物 …… 23
第20図　溝６　出土遺物（１） …… 24
第21図　溝６　出土遺物（２） …… 25
第22図　溝７　平面及び断面図 …… 26
第23図　溝７　出土遺物 …… 27
第24図　表土出土遺物 …… 27
第25図　時期別の遺構変遷 …… 31
第26図　周辺の調査地点 …… 33

表　目　次

表１　調査地点周辺の遺跡 …… 7
表２　溝１　遺物観察表 …… 16
表３　溝２　遺物観察表 …… 17
表４　溝３　遺物観察表 …… 18
表５　溝４　遺物観察表 …… 20
表６　水田跡１　遺物観察表 …… 21
表７　溝５　遺物観察表 …… 23

表８　溝６　遺物観察表（土器）…… 25
表９　溝６　遺物観察表（石器）…… 25
表10　溝７　遺物観察表…… 27
表11　表土出土遺物観察表…… 27
表12　遺構一覧表…… 28
表13　遺物集計表…… 29
表14　周辺の調査地点…… 34

図　版　目　次

写真１　調査地全景（北西から）……巻頭図版１
写真２　溝３・溝６（南から）……巻頭図版２
写真３　溝３・溝６　土層断面（北東から）……巻頭図版２
写真４　水田跡１（北から）……巻頭図版３
写真５　水田跡１　足跡検出（西から）……巻頭図版３
写真６　遺構検出状況（北東から）……図版１
写真７　遺構検出状況（南から）……図版１
写真８　溝１　完掘（西から）……図版２
写真９　溝１（右）・07号遺構（左）　検出状況（南西から）……図版２
写真10　溝１　土層断面（西から）……図版２
写真11　溝１　遺物出土状況（北西から）……図版２
写真12　溝２　完掘（東から）……図版２
写真13　溝２　土層断面（北東から）……図版２
写真14　溝３　遺物出土状況（南西から）……図版２
写真15　溝４　完掘（南から）……図版２
写真16　溝４　土層断面（北西から）……図版３
写真17　溝４　遺物出土状況（南から）……図版３
写真18　水田跡１　畔部分（北から）……図版３
写真19　水田跡１　畔部分土層断面（北東から）……図版３
写真20　溝５　完掘（北から）……図版３
写真21　溝５（右）・16号遺構（左）　土層断面（北東から）……図版３
写真22　溝６　遺物出土状況（南西から）……図版３
写真23　溝７　完掘（南から）……図版３
写真24　溝７　土層断面（Ａ－Ａ´）（北西から）……図版４
写真25　溝７　土層断面（Ｂ－Ｂ´）（北西から）……図版４
写真26　基本層序（調査区北側部分）（北から）……図版４
写真27　基本層序（調査区中央部分）（北から）……図版４
写真28　下層確認（溝６南側）（北東から）……図版４

写真29　下層確認（調査区南端）（北東から）……図版４
写真30　作業風景（１）……図版４
写真31　作業風景（２）……図版４
写真32　実測遺物１～７……図版５
写真33　実測遺物８～17……図版６
写真34　実測遺物18～24・26……図版７
写真35　実測遺物25・27～30……図版８

第Ⅰ章　はじめに

第１節　遺跡の位置

溝之口遺跡は、加古川市加古川町溝之口、美乃利に所在する弥生時代から平安時代までの複合遺跡である（第１図）。

加古川町は、一級河川加古川下流域の左岸側に位置し、ＪＲ加古川駅や商業施設、行政施設などが集中する加古川市の中心市街地である。加古川駅付近は、その利便性から中高層の住宅も多く、東西方向には国道２号線などの幹線道路も通っている。一方、日岡山公園や加古川河川敷など緑豊かな場所もあり、鶴林寺や称名寺をはじめとする古社寺も所在している。

加古川町内の溝之口や美乃利の地域は、市内有数の住宅地として、都市化する駅前周辺地域と一体的な発展を見せるとともに、近郊の田園地域とも接しており、時代の移り変わりに合わせて景観が大きく変化した地域といえる。

第２節　調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯　株式会社サンコー土地建物（以下「事業者」という。）は、兵庫県加古川市溝之口37 番２、37 番３、37 番５～７、39 番、40 番１において宅地造成工事を計画した。工事着手に先立ち、加古川市教育委員会（以下「市教委」という。）は上記事業者から当該地における埋蔵文化財の存否確認の照会を受けた。市教委は、照会地が文化財保護法（以下「法」という。）第 93 条第１項の規定に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地「溝之口遺跡」に該当することを伝え、工事着手の 60 日前までに法に基づく届出が必要である旨の回答を行った。

事業者から平成 26（2014）年 11 月 25 日付けで当遺跡の発掘届が市教委へ提出された。市教委は、工事による掘削がどの程度地中の埋蔵文化財へ影響を及ぼすかを調べるため、平成 27（2015）年１月８日、９日及び３月５日に確認調査を実施した。事業対象地 2,370 ㎡に対して合計 15 ㎡の確認調査を実施した結果、弥生時代及び奈良・平安時代を中心とする遺構や遺物を確認した。確認調査の結果を受け、兵庫県教育委員会から本発掘調査を実施する必要がある旨の通知があったことから、市教委と事業者は協議を重ね、工事計画の見直しや工法の変更ができず遺跡の破壊を回避できない範囲 120 ㎡に対して、本発掘調査を実施することとなった。

現地調査は、敷地北東側の水路際擁壁工事部分を主な対象とし、平成 28（2016）年１月 13 日から調査を開始し、同年２月８日に現地調査を終了した。

調査の経過　平成 28（2016）年１月 13 日から発掘調査を開始した。工事計画図面に基づき調査区を設定し、北側から重機による表土掘削を開始した。調査区北側は広範囲に攪乱されていたものの、地表下約 1.2 ｍの地点で遺構（05 号遺構）を確認した。攪乱範囲の南側からは、地表下１ｍほどで弥生土器を含む水田跡と考えられる堆積層（水田跡１）を確認したことから、この面を遺構確認面として掘削を進めた。翌 14 日に表土掘削が終了し、1 月 18 日に遺構検出状況の全景写真撮影を行った後、

遺構の内部精査を開始した。降雪などによる中止をはさみながら、各遺構の図化や写真撮影を進めた。１月 25 日には、水田跡を切っている大型の溝状遺構（溝３・６）を調査するため、調査区の一部を南西側に拡張して調査を継続した。２月２日にすべての遺構精査を完了し、翌３日に完掘全景写真の撮影を行った。２月５日には調査区壁面に下層確認のための断ち割り調査坑を掘削し、図化等の記録を行ったのち埋戻しを開始した。２月８日にすべての作業を終了し、現地を引き渡した。

報告書刊行へ向けた整理作業は４月 12 日より開始し、５月 18 日に遺物洗浄・注記・接合などの一次整理が完了した。その後、数度の中断を挟みながら遺物実測や遺構図整理を進め、平成 29（2017）年５月 15 日から報告書原稿の執筆を開始した。７月 14 日から編集作業を開始し、12 月 28 日の報告書刊行をもってすべての調査は完了した。

第３節　遺跡の環境

地理的環境　溝之口遺跡の範囲は、東西 0.6 ㎞、南北約１㎞にわたり、市内有数の集落遺跡である。今回の調査地は、遺跡内の中央やや東寄りに位置しており、加古川バイパス（国道２号線）溝之口北交差点の南東付近にあたる（第２図）。ＪＲ加古川駅の南東約１㎞の場所であり、現在の加古川河口付近からは北東に約 5.3 ㎞の位置である。

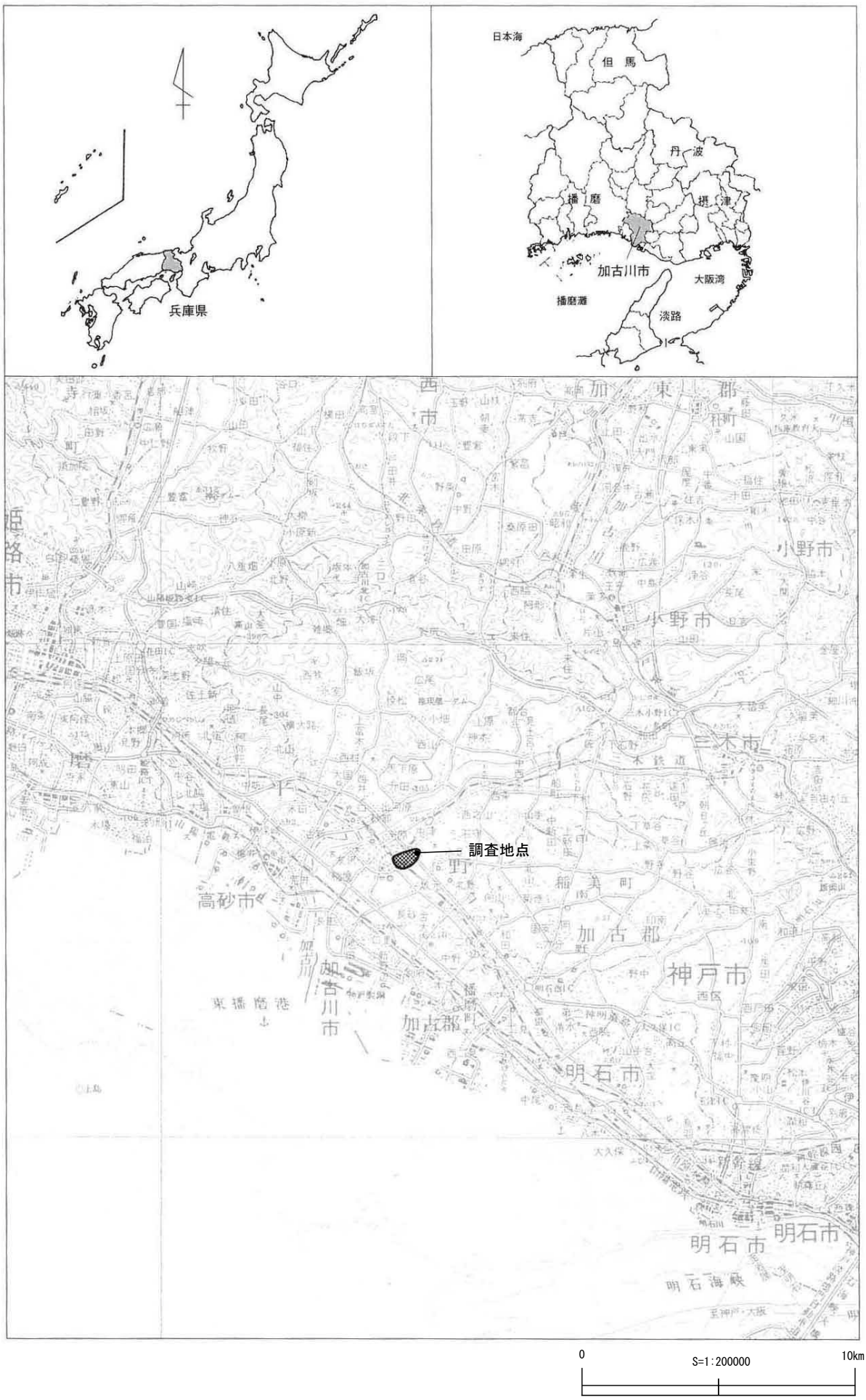
地理的には、市名の由来ともなっている一級河川加古川の下流域に位置し、加古川左岸の沖積平野上に立地している（第３図）。加古川は、兵庫県丹波市青垣町を源として南流し、加古川市内の日岡山と升田山という２つの岩山の間を通過する。その後播磨灘へ流れ込むが、現在のように流路が固定される以前は、この岩山の間を通過した先は幾筋もの流路に分かれて流れていた。その結果、下流域には大規模な沖積平野（氾濫原）が形成されることとなった。この沖積平野の東側は、六甲山塊によって形成された隆起扇状地となっており、神戸市垂水区神出町に所在する雌岡山付近を頂点とする広大な「いなみの台地」を形成している。

溝之口遺跡の集落は、上記沖積平野のうち、旧流路の影響によって形成された自然堤防上を中心に広く展開している。今回調査地における現地表面の標高は約６ｍで、調査前までは長らく田地や宅地として活用されてきた土地である。

歴史的環境と周辺の遺跡（第４図・表１）　加古川下流域は、河川や海上交通のほか山陽道に代表される陸上交通の要衝でもあり、溝之口遺跡以外にも多くの遺跡が密集している。旧石器時代から中世にかけてその時々に特徴的な遺跡が残されている。以下に、溝之口遺跡の立地する加古川下流域の沖積平野を中心に、時代ごとに変化する遺跡の様相を概観し、当該地における歴史的環境について述べる。

旧石器時代・縄文時代　旧石器時代・縄文時代の遺跡は、それ以後の時代に比べて調査例や発見例が少ない。また、「石器」や「縄文土器」など遺物のみが確認されている場合がほとんどである。

旧石器時代の遺跡としては、溝之口遺跡の北東に位置し、加古川狭窄部の一角を形成する日岡山（標高約 60 ｍ）の丘陵斜面に日岡山遺跡（４）がある。また、東側のいなみの台地上を流れる喜瀬川沿岸には山之上遺跡（１）や播磨町に所在する大中遺跡（播６）がある。いずれも表面採集の遺物が中心であるが、石器製品だけでなく剥片や砕片（チップ）なども多く採集されていることから、地中に



第1図　溝之口遺跡の位置（『溝之口遺跡』図版1　兵庫県教育委員会　2006年　より作成）

ブロックやユニットを形成するような文化層が残されている可能性も考えられる。

縄文時代の遺跡としては、本遺跡の南東段丘上の縁辺に坂元遺跡（634）がある。晩期の埋甕土坑が複数調査されており、微高地上に埋甕を用いた墓域が展開していたと考えられている（渡辺2009）。他に、前出の大中遺跡や加古川右岸側の沖積地にある砂部遺跡（９）、その北側の段丘上にある岸遺跡（7）などにおいて晩期の土器出土例があるが、現在のところ遺構は確認されていない。なお、市域全体では、八幡町上西条にある宮山遺跡において後期の竪穴建物跡や集石遺構が検出されたという報告例があるが、詳細は不明である（松下 1984）。

弥生時代　弥生時代になると遺跡の数は大幅に増加する。

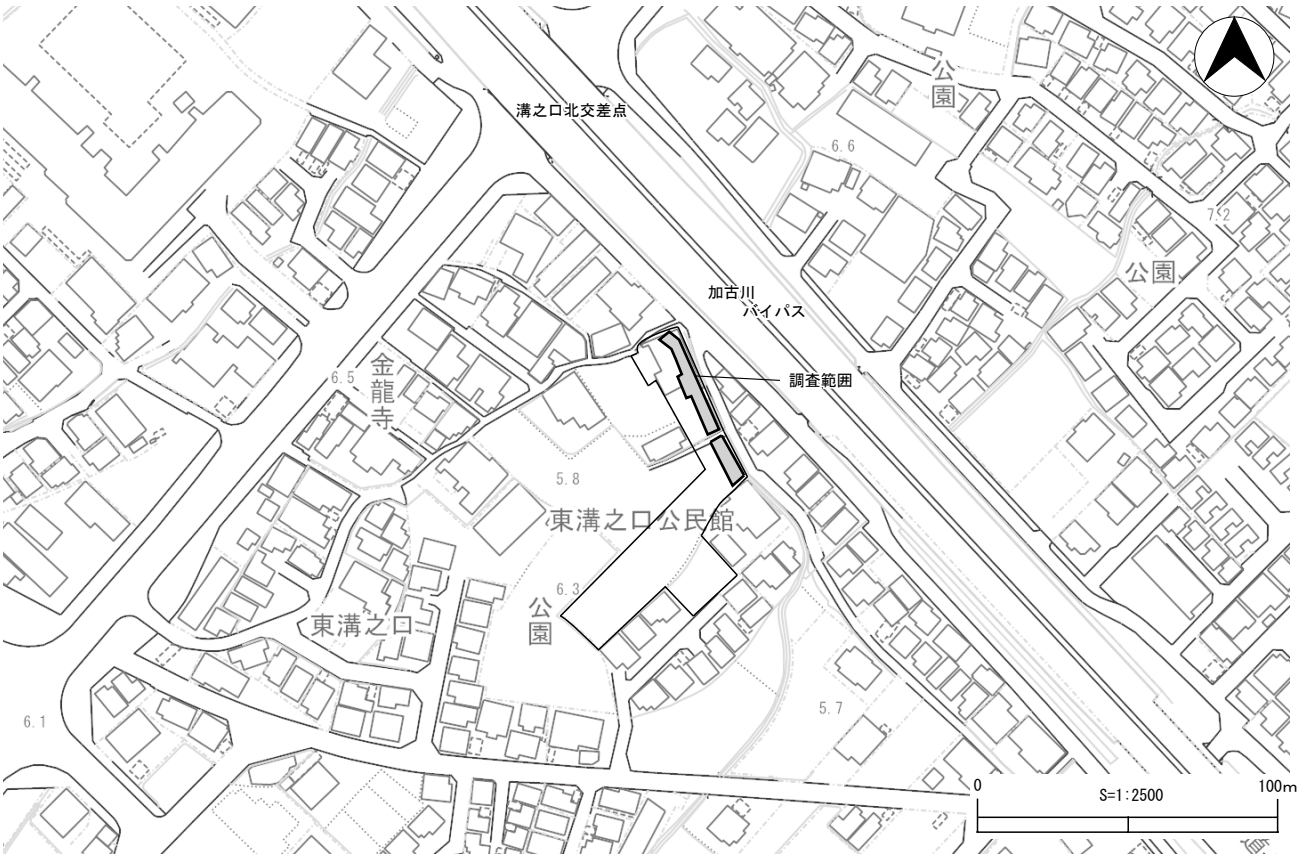
前期の遺跡としては、溝之口遺跡の北東に隣接する美乃利遺跡（218）において溝や土坑とともに、広範囲に広がる水田跡が検出されている。また、別府川を挟んだ東側段丘上に立地する坂元遺跡でも土器の出土が認められる。さらに、東側の喜瀬川右岸の大中遺跡では土坑が検出されている。しかし、前期では加古川右岸側の沖積地においてより重要な遺跡が展開している。砂部遺跡と東神吉遺跡（８）は、現在の加古川右岸沖積地上に隣りあって所在する集落遺跡である。両者を同一の集落と考える見方もあり、前期における拠点的な集落と考えられている。砂部遺跡では、他地域においても発見例の少ない土器焼成土坑が複数検出されており注目される。

中期の遺跡としては、溝之口遺跡とその周辺の美乃利遺跡、坂元遺跡がこの地域の代表例として挙げられる。前期から続く集落が中期において飛躍的に成長し、この時期における拠点集落といえる規模に拡大する。開発に伴う調査も多く実施されたことから、竪穴建物が密集する居住域、方形周溝墓を主体とする墓域、水田が営まれた生産域という集落景観が徐々に明らかにされつつある。また、溝之口遺跡出土の豊富な土器群は、東播磨の中期弥生土器の基準資料として紹介されることも多い。東側のいなみの台地上では遺跡は少ないが、中期の後半になって喜瀬川寄りの平岡町高畑において長畑遺跡（555）が成立し、喜瀬川右岸では大中遺跡で竪穴建物が検出されている。これらの遺跡は、溝之口遺跡からの分村集落とも考えられている。加古川の右岸側では、沖積地内に前期から継続する砂部遺跡があり、丘陵上には中期のみ短期的に存続した集落と考えられる平山遺跡（11）などがある。

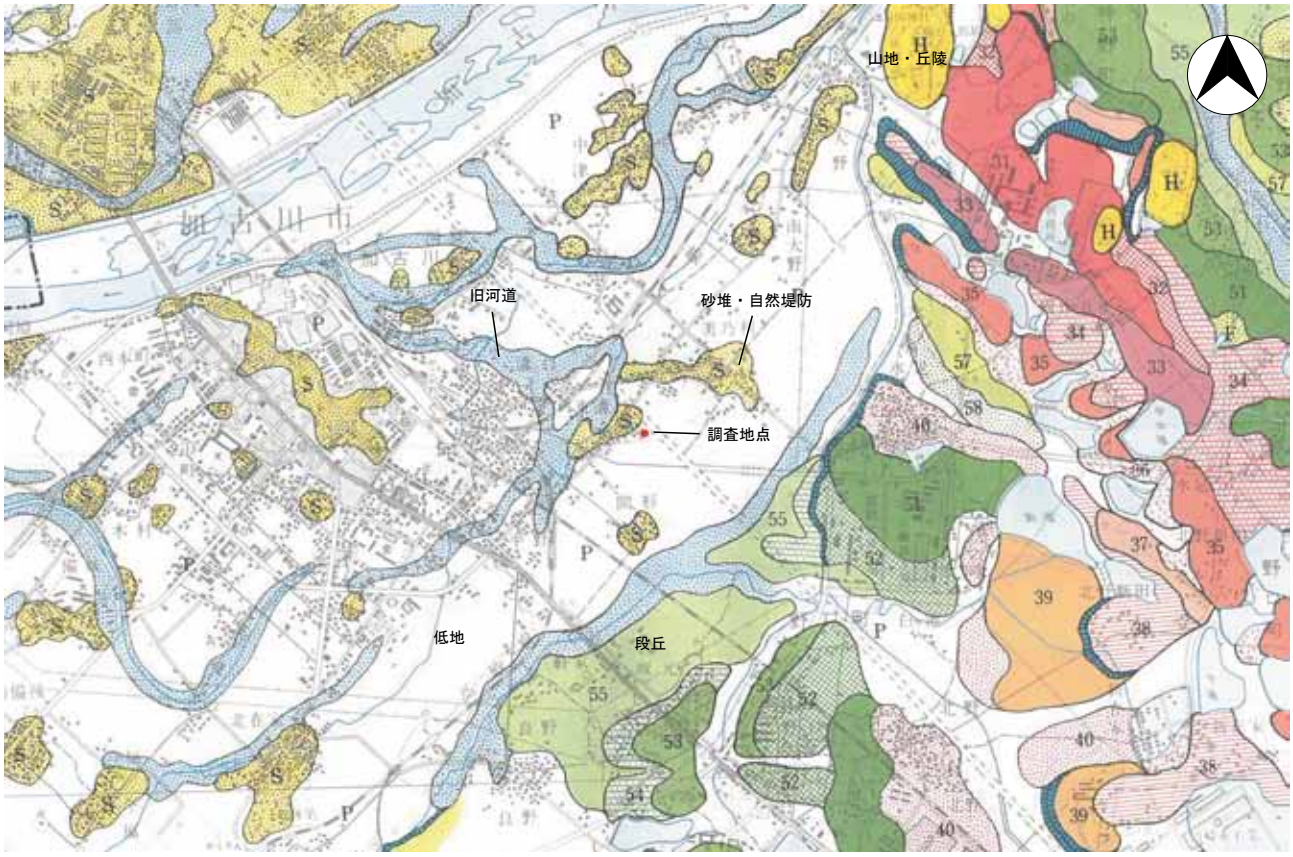
後期の遺跡としては、溝之口遺跡が集落として継続しているとともに、隣接する坂元遺跡や美乃利遺跡において、より多くの遺構・遺物が確認されるようになる。また、中期後半に成立した長畑遺跡も継続して集落が営まれる。一方、後期の前半に遺構の存在が途絶える大中遺跡は、後期後半になって再び集落として成立し、終末期には拠点集落といえるほどの規模に成長していく。加古川右岸側では、引き続き砂部遺跡があり、段丘上の岸遺跡でもまとまった土器の出土が認められるが、いずれも遺構は乏しい。

古墳時代　古墳時代は、集落遺跡の発見例や調査事例が少なく詳細な検討は進んでいない。対して、加古川流域一帯に築かれた豊富な古墳群の様相について多くの研究や報告がなされている。

前期の古墳としては、溝之口遺跡の北東側に位置する日岡山古墳群が著名である。これまで本格的な調査は行われていないものの、宮内庁が所管する、ひれ墓古墳（26）（「日岡陵古墳」ともいう）をはじめ合計８基の大型古墳が確認されている。そのうち、ひれ墓古墳、勅使塚古墳、西大塚古墳、南大塚古墳、北大塚古墳の５基は前方後円墳で、残る西車塚古墳、東車塚古墳（すでに消滅）、狐塚古



第2図　調査地点の位置



第3図　調査地点周辺の旧地形
（『加古川市史』第4巻付図1 兵庫県加古川市 1996年より作成）

0　S＝1:30000　1500m

第4図　調査地点周辺の遺跡

（『兵庫県移籍地図 第3分冊 遺跡分布地図』兵庫県教育委員会2011年より作成）

遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
1	山之上遺跡	旧石器	139	平山 3号墳	古墳	243	石弾城跡	室町
4	日岡山遺跡	旧石器	140	池尻 3号墳	古墳	245	横倉城跡	室町
7	岸遺跡	縄文～弥生	141	池尻 4号墳	古墳	246	安田構居跡	室町
8	東神吉遺跡	弥生～古墳	152	升田山 15号墳	古墳	247	稲屋構居跡	室町
9	砂部遺跡	縄文～奈良	153	池尻 16号墳	古墳	248	石守構居跡	室町
10	溝之口遺跡	弥生～平安	154	池尻 17号墳	古墳	249	手末構居跡	室町
11	平山遺跡	弥生中期	155	池尻 19号墳	古墳	250	高田構居跡	室町
13	中西台地遺跡	弥生～室町	156	池尻 20号墳	古墳	251	中津構居跡	室町
14	中西低地遺跡	弥生～古墳	167	池尻 32号墳	古墳	256	神吉城跡	室町
15	神吉遺跡	弥生後期	168	池尻 33号墳	古墳	257	砂部構居跡	室町
16	今福遺跡	弥生後期	169	池尻 34号墳	古墳	258	一色構居跡	室町
17	長砂遺跡	弥生後期	170	池尻 35号墳	古墳	259	野口城跡	室町
18	樋之口遺跡	弥生後期	171	池尻 36号墳	古墳	260	長砂構居跡	室町
22	東車塚古墳	古墳	172	池尻 37号墳	古墳	261	細田構居跡	室町
23	聖陵山古墳	古墳	173	池尻 38号墳	古墳	262	尾上構居跡	室町
24	狐塚古墳	古墳	174	池尻 39号墳	古墳	263	加古川城跡	室町
25	勅使塚古墳	古墳	175	池尻 40号墳	古墳	276	平津構居跡	室町
26	ひれ墓古墳	古墳	176	池尻 41号墳	古墳	277	池尻 18号墳	古墳
27	西車塚古墳	古墳	177	池尻 42号墳	古墳	279	地蔵寺 6号墳	古墳
28	南大塚古墳	古墳	178	池尻 43号墳	古墳	282	水足 2号墳	古墳
29	西大塚古墳	古墳	179	池尻 44号墳	古墳	292	北在家遺跡	弥生～古墳
30	北大塚古墳	古墳	180	池尻 45号墳	古墳	294	粟津遺跡	弥生～古墳
44	池尻 2号墳	古墳	181	池尻 46号墳	古墳	305	具平塚古墳	古墳
45	カンス塚古墳	古墳	182	池尻 47号墳	古墳	333	平山 4号墳	古墳
95	二塚 1号墳	古墳	183	池尻 48号墳	古墳	357	平野遺跡	弥生
96	二塚 2号墳	古墳	184	池尻 49号墳	古墳	478	佐伯寺跡	平安
97	若神社古墳	古墳	185	池尻 50号墳	古墳	480	石守 2号墳	古墳
98	日岡山 1号墳	古墳	186	池尻 51号墳	古墳	481	石守 3号墳	古墳
99	日岡山 2号墳	古墳	187	池尻 52号墳	古墳	488	古代山陽道	奈良
100	日岡山 3号墳	古墳	188	池尻 53号墳	古墳	508	石守古墳群 4号墳	古墳
101	日岡山 4号墳	古墳	189	池尻 54号墳	古墳	509	石守古墳群 5号墳	古墳
102	日岡山 5号墳	古墳	190	升田山 1号墳	古墳	514	岸城跡	室町
103	日岡山 6号墳	古墳	191	升田山2号墳	古墳	515	岸南遺跡	弥生
104	日岡山 7号墳	古墳	192	升田山3号墳	古墳	518	升田山 11号墳	古墳
105	日岡山 8号墳	古墳	193	升田山4号墳	古墳	519	升田山 12号墳	古墳
106	日岡山 9号墳	古墳	194	升田山5号墳	古墳	528	松岡青蘿墓	江戸
107	日岡山 10号墳	古墳	195	升田山6号墳	古墳	555	長畑遺跡	弥生
108	日岡山 11号墳	古墳	196	升田山7号墳	古墳	560	西村遺跡	弥生～奈良
109	日岡山 12号墳	古墳	197	升田山8号墳	古墳	607	升田山 13号墳	古墳
110	日岡山 13号墳	古墳	198	升田山9号墳	古墳	608	升田山 14号墳	古墳
111	日岡山 14号墳	古墳	199	升田山10号墳	古墳	611	天神前遺跡	奈良～平安
112	日岡山 15号墳	古墳	200	天下原古墳	古墳	614	鶴林寺	平安～中世
113	日岡山 16号墳	古墳	212	尾上遺跡	弥生～古墳	617	具平塚遺跡	弥生
114	日岡山 17号墳	古墳	213	浜の宮遺跡	弥生～古墳	621	教信寺	平安～中世
115	日岡山 18号墳	古墳	218	美乃利遺跡	弥生～鎌倉	622	粟津大年遺跡	中世
116	日岡山 19号墳	古墳	219	升田遺跡	奈良	634	坂元遺跡	縄文～中世
117	日岡山 20号墳	古墳	220	古大内遺跡	奈良	636	大野遺跡	平安～中世
118	石守 1号墳	古墳	221	神吉南遺跡	弥生～奈良	高85	米田遺跡	弥生～中世
119	水足 1号墳	古墳	222	天下原遺跡	弥生～奈良	高90	朝日町遺跡	弥生～古墳
132	地蔵寺 1号墳	古墳	223	野口廃寺	奈良	播1	本荘散布地	中世
133	地蔵寺 2号墳	古墳	224	溝之口廃寺	奈良	播2	古田1号散布地	中世
134	地蔵寺 3号墳	古墳	225	石守廃寺	奈良	播3	古田2号散布地	中世
135	地蔵寺 4号墳	古墳	228	中西廃寺	奈良	播4	古田3号散布地	中世
136	地蔵寺 5号墳	古墳	231	日岡山壺棺墓	弥生	播5	大中散布地	弥生～中世
137	平山 1号墳	古墳	234	日岡遺跡	弥生～古墳	播6	大中遺跡	旧石器～古墳・中世
138	平山 2号墳	古墳	241	古大内城跡	室町			

表１　調査地点周辺の遺跡

墳の３基は円墳もしくは前方後円墳と考えられている。ひれ墓古墳は、景行天皇皇后にあたる「稲日大郎姫命（いなびのおおいらつめのみこと）」の陵墓に指定されている。古墳群中から採集された遺物としては、南大塚古墳や勅使塚古墳から三角縁神獣鏡、東車塚古墳から三角縁神獣鏡・方格Ｔ字文鏡・獣文鏡及び石釧２点、北大塚古墳から埴輪片や短甲片などがある。海岸部には、溝之口遺跡の南東段丘上の縁辺部に聖陵山古墳（23）が単独で所在しており、特異な位置を占めていることで注目される。前方後円墳もしくは前方後方墳と伝えられるが、これまで発掘調査が行われたことはなく前方部はすでに失われている。集落遺跡としては、溝之口遺跡の南側エリアにおいて竪穴建物などが検出されており、日岡山古墳群の母体となる集落の可能性が指摘されている。また、喜瀬川沿岸の大中遺跡は引き続き充実した大規模集落として存続しており、同時期の古墳群との関係が注目される。

中期になると、日岡山でみられたような首長墓墳が東側の西条地区の丘陵地において築かれるようになる。行者塚古墳、人塚古墳、尼塚古墳という３基の大型古墳が西条古墳群として国史跡に指定され保存整備されている。また、中期後半には加古川右岸で平荘湖古墳群が新たに築かれる。平荘湖古墳群は、カンス塚古墳（45）や池尻２号墳（44）に代表される竪穴式石室ないし竪穴系横口式石室を埋葬施設とする段階から、升田山 15 号墳や池尻 16 号墳に代表される横穴式石室を埋葬施設とする段階まで合計 68 基の古墳が確認されており、後期まで連続する市内最大規模の古墳群である。ダム建設による緊急発掘において、馬具や金製耳飾などの渡来系遺物が多く副葬されていることが明らかにされた。現在は、古墳の多くが昭和 41（1966）年に造られた人工湖である平荘湖の湖底へと没し墳丘を確認することはできない。中期の集落遺跡としては、引き続き溝之口遺跡が存続し、その南側の沖積地に立地する北在家遺跡（292）でも竪穴建物が検出されている。溝之口遺跡では、竪穴建物跡から複数の韓式系土器が出土している。加古川右岸側では、砂部遺跡で掘立柱建物跡や溝、土坑が検出され、韓式系土器が複数出土している。

後期の古墳は、市内各所に円墳や方墳が数多く残されている。溝之口遺跡周辺における主要なものは、中期後半から続く平荘湖古墳群のほか、日岡山の南東斜面にも再び古墳群が築かれ、弥生時代の集落が所在した坂元遺跡においても小規模な古墳群が検出されている。また、溝之口遺跡の南側の段丘縁辺上に所在する具平塚古墳（305）は、江戸時代中期に記された「播磨鑑」において、平安時代中期の人物である村上天皇の皇子、具平親王の陵墓として紹介されているが、現地における観察所見から、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の円墳と推定される。集落遺跡としては、溝之口遺跡で引き続き竪穴建物跡の調査事例がある。また、東隣の坂元遺跡では、竪穴建物跡のほか、集落と古墳群の間において火を用いた祭祀土坑が調査されている。さらに、古墳群のすぐ南側では、石見型盾形埴輪をはじめ、古墳群に用いるための各種の埴輪を焼成した窯跡なども検出されており、集落北側の高台に古墳が築かれ、その隣接地において祭祀や埴輪製作が行われた様子をよく伝えている。他には、前期以降集落の痕跡が確認されなくなった大中遺跡において、再度竪穴建物が検出されるようになる。

奈良時代・平安時代　奈良時代は、律令制の導入により新たな行政単位が設けられ、溝之口遺跡周辺は「播磨国賀古郡」の範囲に含まれる。また、遺跡の南側には官道として整備された古代山陽道（488）が通っていたとされる。古代山陽道沿いを南東に進むと、古大内遺跡（220）が位置しており、「賀古駅家」に比定されている。山陽道に接続する駅家の入口付近が発掘調査されている。古大内遺跡の北

東側には、古代寺院である野口廃寺（223）がある。発掘調査の結果、瓦積基壇で構築された塔・講堂・小堂宇が確認されている。北側の曇川沿岸には石守廃寺（225）があり、法隆寺式の伽藍配置を基準とし、この地域で産出される竜山石（流紋岩質凝灰岩）製の心礎を持つ塔跡や瓦積基壇で構築された金堂跡などが調査されている。加古川右岸側では、沖積地を望む段丘上に中西廃寺（228）がある。発掘調査は行われていないが、採集された瓦から平安時代後期まで存続したことがわかっている。市内には、ほかにも西条廃寺（山手二丁目）や山角廃寺（平荘町山角）などの古代寺院が知られている。加えて、溝之口遺跡では、遺跡範囲の北側を中心に官衙遺跡を推測させる遺構・遺物が確認されている。具体的な遺構としては、柵や溝に囲まれ「コ」字形に配置された建物跡や、倉庫群と考えられる多数の掘立柱建物跡、井戸などがあり、それらの遺構から「大毅」と記された墨書土器や銅製・石製の銙帯具などが出土したことから「賀古郡衙」の候補地となっている。隣接する美乃利遺跡からは、「郡」と記された墨書土器なども出土している。さらに、溝之口遺跡にほど近い坂元遺跡、大野遺跡（636）からも同時期の遺構・遺物が多数確認されており、今後の調査の進展によって、郡衙や駅家と、それを取り巻く集落の様相が明らかにされることが期待される。また、溝之口遺跡の範囲内北端は、古代瓦が表面採取されたことを理由に「溝之口廃寺(224)」として遺跡登録されているが詳細は不明であり、郡衙との関係が注目される。加古川右岸側では、沖積地に砂部遺跡、神吉南遺跡（221）、天下原遺跡（222）、升田遺跡（219）などがあり、段丘上に中西台地遺跡、西村遺跡などがある。いずれも比較的小規模な集落と考えられ、中西廃寺を囲むような位置関係にある。

平安時代は、先述した古代寺院の多くが９世紀までにいったん廃絶する傾向にあり、「日本三代実録」において、播磨諸郡の官舎・諸定額寺の堂塔が悉く倒壊したことが載る、貞観 10（868）年の播磨国大地震との関連が指摘されている。後期までには、新たな寺院として鶴林寺（614）、佐伯寺跡（478）、教信寺（621）などが成立したと考えられる。鶴林寺は、聖徳太子の建立という縁起を持つが、本尊の薬師如来像や法華堂（太子堂）・常行堂の年代観から、この時期に伽藍が整えられたとする説が有力となっている。集落跡としては、引き続き溝之口遺跡、坂元遺跡、美乃利遺跡において多くの遺構・遺物が調査されており、加古川右岸側では中西台地遺跡で集落が継続していたものと考えられている。

鎌倉時代・室町時代　市内全域で調査事例が少なく明確な遺跡は少ない。溝之口遺跡の周辺では、美乃利遺跡において鎌倉時代の掘立柱建物跡や屋敷墓が検出され、坂元遺跡では掘立柱建物跡や水田跡などが検出されている。美乃利遺跡に接する大野遺跡では、やはり鎌倉時代の掘立柱建物跡や墓が検出されている。また、同じ沖積地上に立地する粟津大年遺跡（622）では、室町時代まで続く掘立柱建物跡や木棺墓などが検出されている。いずれの遺跡も集落跡と考えられる。加古川右岸側では、中西台地遺跡において方形居館に付属する堀が調査されている。ほかに、具体的な調査事例は乏しいものの、室町時代に築かれたとされる城や構居（かまい）が数多く存在したことが、文献資料の分析などからわかっている。溝之口遺跡周辺では、戦国期の羽柴秀吉による播磨平定に深く関わる加古川城跡（263）、野口城跡（259）、神吉城跡（256）をはじめ、加古川左岸側に石弾城跡（243）、横倉城跡（245）、中津構居跡（251）、稲屋構居跡（247）、尾上構居跡（262）、長砂構居跡（260）、一色構居跡（258）、手末構居跡（249）などがあり、右岸側には岸城跡（514）、砂部構居跡（257）、平津構居跡（276）などが遺跡登録されている。なお、加古川城跡については、鎌倉時代を通じて播磨国の守護所が置かれていたものと考えられ、城として活用される以前の様相にも注意を払う必要がある。

江戸時代以降　溝之口遺跡周辺は、江戸時代をとおして姫路藩領であった。溝之口遺跡に南接する加古川町寺家町周辺は、京都から下関を通り長崎に至る西国街道（中国路）の宿場町として栄え、加古川舟運の高瀬舟が往来し、内陸部との物流の拠点であった。江戸時代の遺跡は、中期に俳人として活躍した松岡青蘿の墓所が「松岡青蘿墓（528)」として登録されている。また、平成 16（2004）年に実施された坂元遺跡の発掘調査では、江戸時代の道路跡が検出されており、西国街道の一部と考えられている。

明治時代になると、加古川には橋が架けられ、明治 21（1888）年に山陽鉄道（現ＪＲ山陽本線）が開通し、明治 31（1898）年には日本毛織工場の操業が始まるなど近代化が進む一方、宿場町としての機能は衰えていった。大正２（1913）年には播州鉄道（現ＪＲ加古川線）が開通したことで高瀬舟も姿を消した。現在の加古川市は、播磨灘沿岸の工業地帯や神戸・大阪方面のベッドタウンとなっている。

第Ⅱ章　遺構と遺物

第１節　概要

今回の調査では、弥生時代から平安時代までの遺構が合計 21 基検出された（第７図、表 12）。内訳は、溝状遺構 10 条、ピット７基、性格不明遺構３基及び水田跡である。

本報告書では、上記の遺構のうち比較的遺存状態が良く、一定量の遺物が出土した溝状遺構７条と水田跡を選定し、次節以降にその詳細を述べる。

遺物は、遺物収納コンテナ６箱分に相当する破片総数 681 点（21,115 ｇ）が出土した（表 13）。内訳は、弥生土器 349 点（10,263 ｇ）、土師器 193 点（3,253 ｇ）、須恵器 56 点（3,665 ｇ）、石器５点（840 ｇ）、鉄製品１点（５ｇ）、礫３点（3,057g）、土器極小破片 74 点（32 ｇ）である。

本報告書では、上記の遺物のうち実測・記録可能な弥生土器 18 点、土師器６点、須恵器５点、石器１点を抽出し、次節以降にその詳細を述べる。

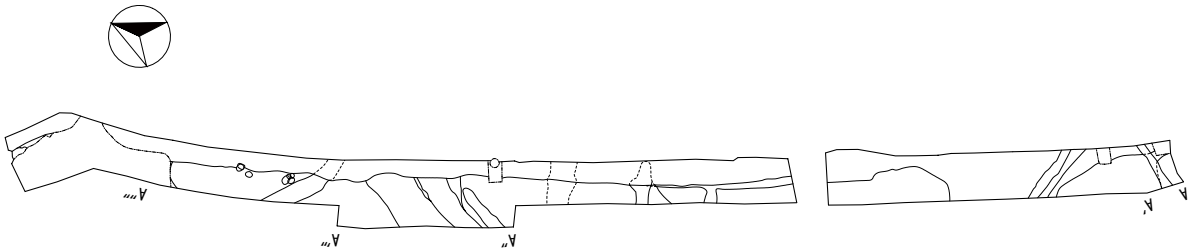
第２節　基本層序

今回調査地点は、大きく３段階（第Ⅰ～Ⅲ層）の基本堆積により成り立っている。

第Ⅰ層は、調査前まで耕作地として利用されていた表層及びそれに伴う床土層である。地表面の標高は約６ｍを測り、地表下約 0.6 ｍまで堆積する。

第Ⅱ層は、弥生時代から古墳時代の土器等を含む遺物包含層である。おおむね２層に分かれるが、遺物は混在しており時期差等は検討できなかった。上面の標高は約 5.4 ｍである。この面から、平安時代の溝状遺構（溝７）を検出したが、他の遺構はすべて第Ⅲ層上面から検出された。

第Ⅲ層は、シルト質の自然堆積層（いわゆる「地山」）である。上面の標高は約 5.1 ｍである。こ



第 5 図　基本層序観察地点

基本層序　今回調査地点における基本層序は下記のとおりである（第６図）。

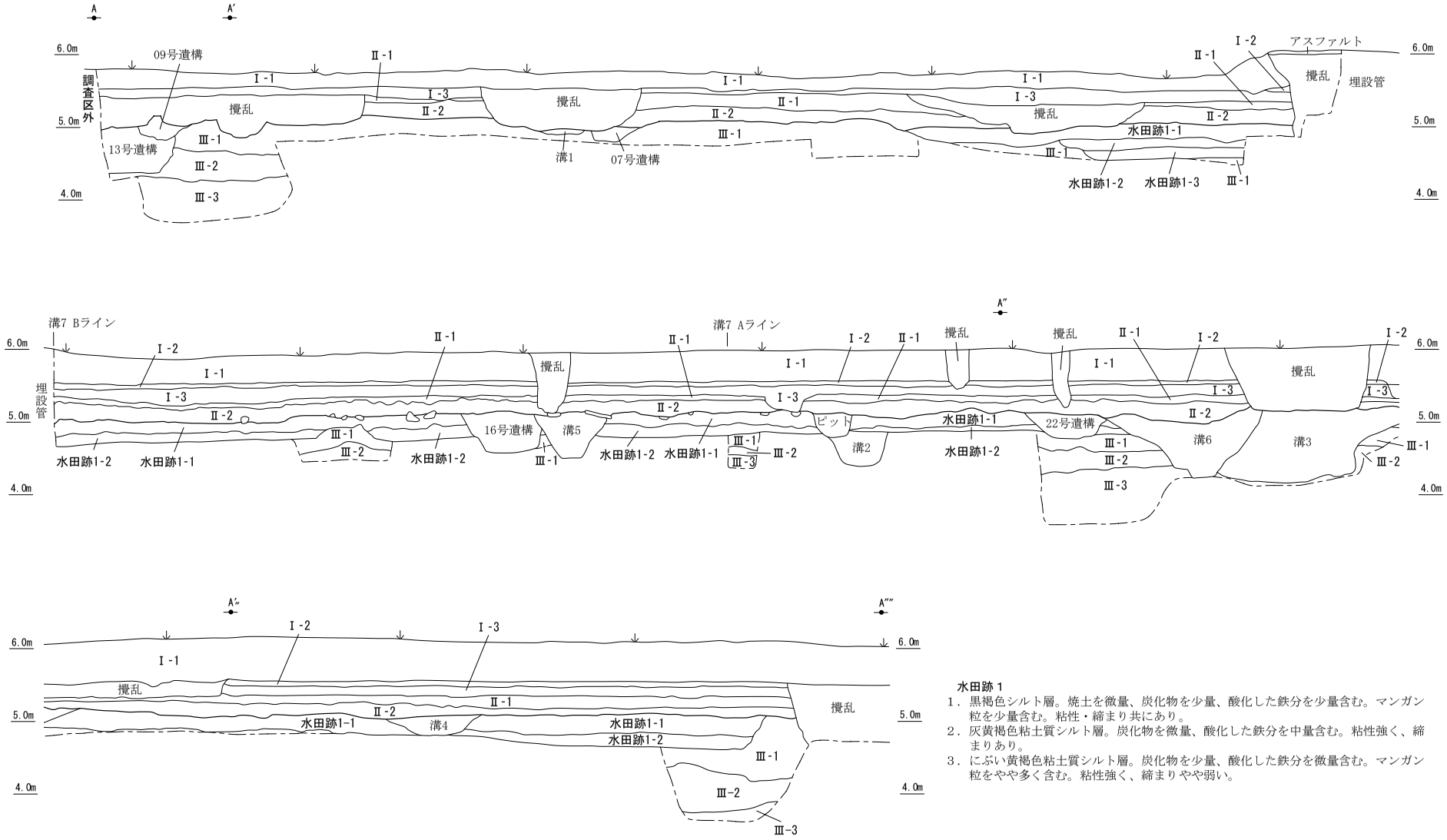
第Ⅰ層　表土層。主に現代耕作土や床土層。

Ⅰ－１層　表土・耕作土。黒褐色土層。炭化物を微量、粘土粒を少量、酸化した鉄分を少量含む。粘性、締まり共にあり。

Ⅰ－２層　床土。黄褐色シルト層。炭化物、粘土粒を微量含む。粘性、締まり共にあり。

Ⅰ－３層　旧床土。にぶい黄橙色シルト層。炭化物、粘土粒を微量含む。マンガン粒を微量含む。粘性、締まり共にあり。

第Ⅱ層　弥生時代から古墳時代の遺物包含層。



水田跡１

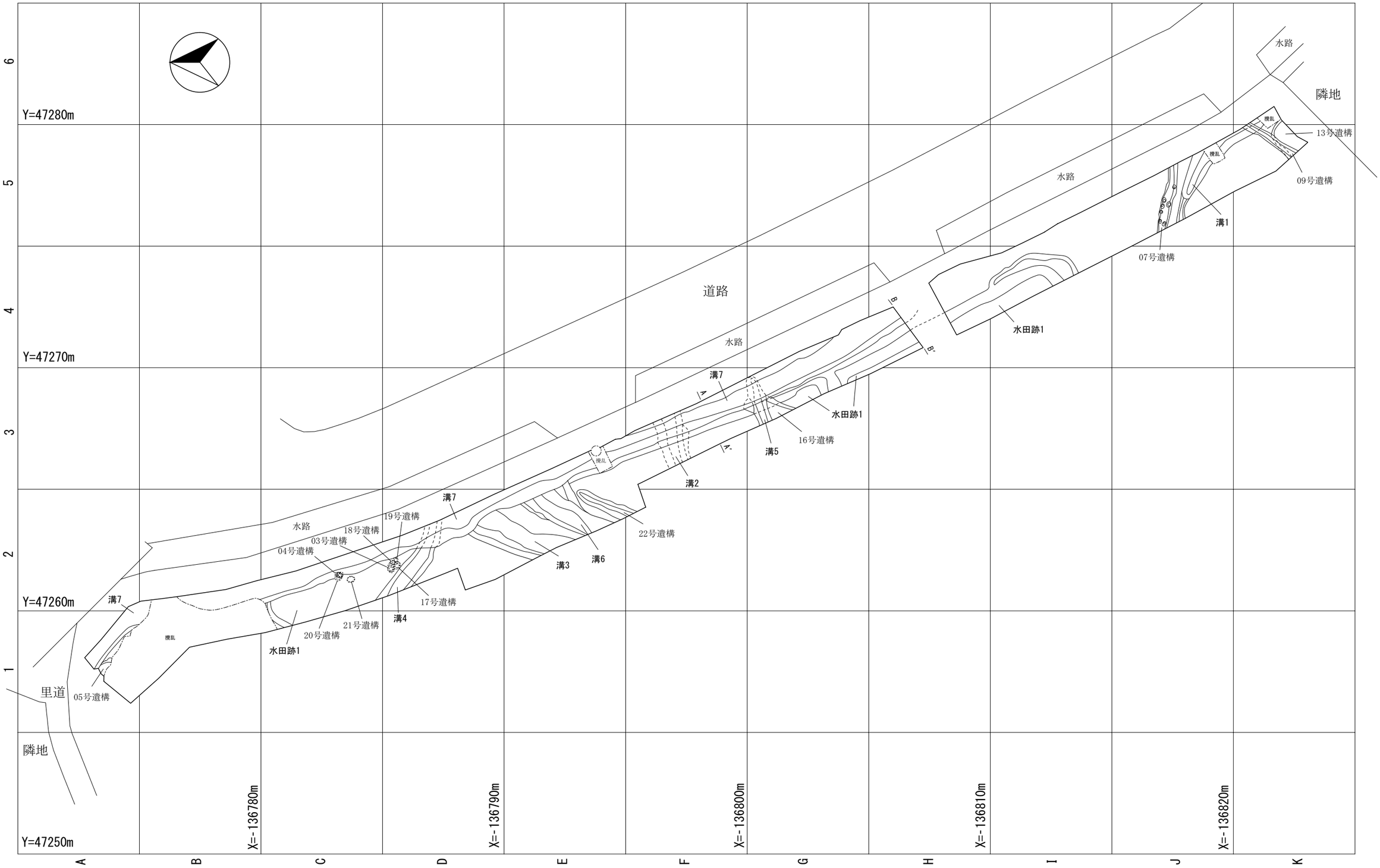
1．黒褐色シルト層。焼土を微量、炭化物を少量、酸化した鉄分を少量含む。マンガン粒を少量含む。粘性・締まり共にあり。

2．灰黄褐色粘土質シルト層。炭化物を微量、酸化した鉄分を中量含む。粘性強く、締まりあり。

3．にぶい黄褐色粘土質シルト層。炭化物を少量、酸化した鉄分を微量含む。マンガン粒をやや多く含む。粘性強く、締まりやや弱い。

0　S=1:80　5m

第 6 図　基本層序・水田跡１断面図



第 7 図　遺構配置

0　S=1:150　10m

Ⅱ－１層　灰黄褐色シルト層。炭化物を微量含む。マンガン粒を少量含む。粘性やや弱く、締まりやや強い。本層上面から平安時代の溝状遺構（溝７）を検出。

Ⅱ－２層　黒褐色シルト層。炭化物、酸化した鉄分を微量含む。マンガン粒を少量含む。粘性あり、締まりやや強い。

第Ⅲ層　自然堆積層。

Ⅲ－１層　暗灰黄色砂質シルト層。粘性強く、締まりやや弱い。本層上面が今回調査における主要な遺構確認面である。

Ⅲ－２層　灰黄色砂層。粘性弱く、締まりやや弱い。

Ⅲ－３層　オリーブ褐色砂層。粘性弱く、締まり強い。

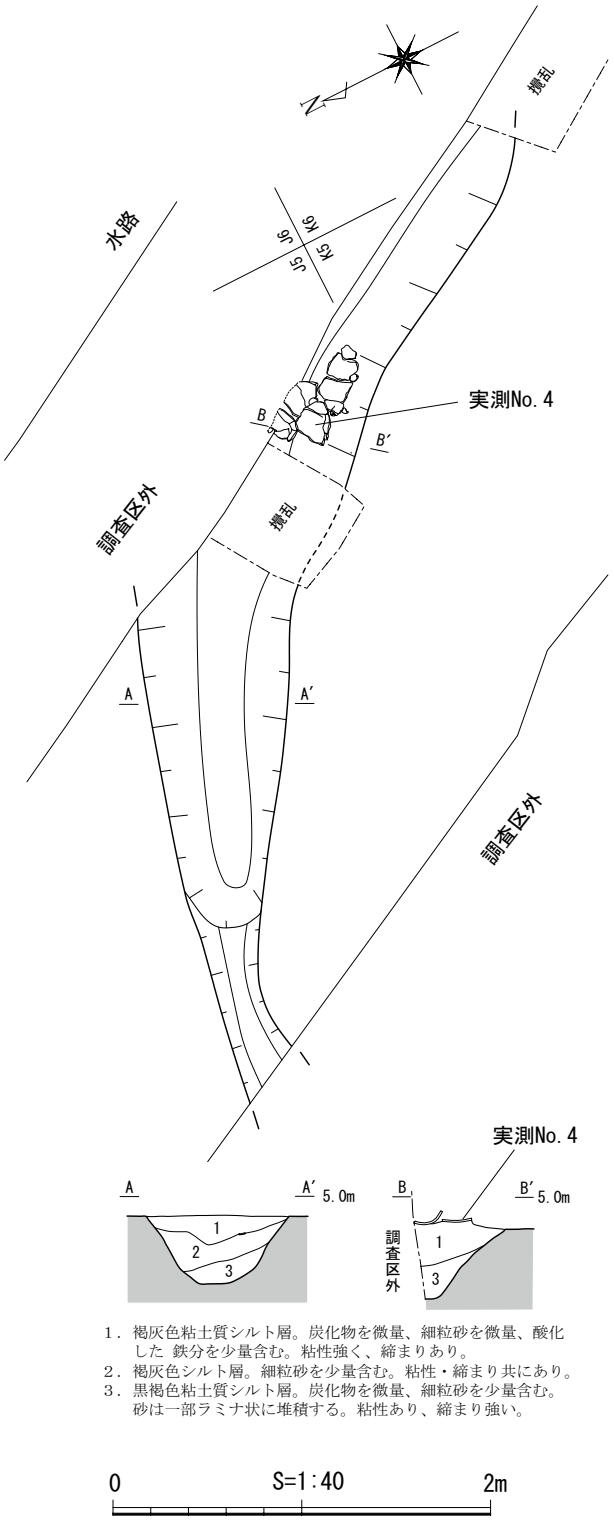
第３節　弥生時代の遺構と遺物

■溝１（第８・９図、表２、写真８～11）

位　　置：調査区南端のＪ５・Ｋ５・Ｋ６グリッドに位置する。09 号遺構（溝）に切られ、一部は攪乱に壊されている。遺構の西側と東側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 4.90 ｍで、現地表面から約 0.8 ｍ下に位置している。東西方向の溝で、東寄りでは南西方向に軸線が変わる。軸方向は、西側で N-70°-W、東側で N-32°-W を示す。

形　　態：平面形は溝状を呈する。幅は一定ではなく、西側の調査区壁面付近は 0.24 ｍと細く、東側へ向かって緩やかに広がっている。両側とも調査区外へ及んでいるため全体形は不明である。断面形は、西側では浅い皿状を呈し、一段低くなる東側ではＵ字状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。

規　　模：検出された範囲での長さは 5.42 ｍを測る。幅と深さは、西側で幅 0.24 ｍ、深さ 0.08 ｍと細く浅いが、調査区中央付近より東側は幅 0.80 ｍ、深さ 0.40 ｍと大きくなる。



第 8 図　溝１ 平面及び断面図

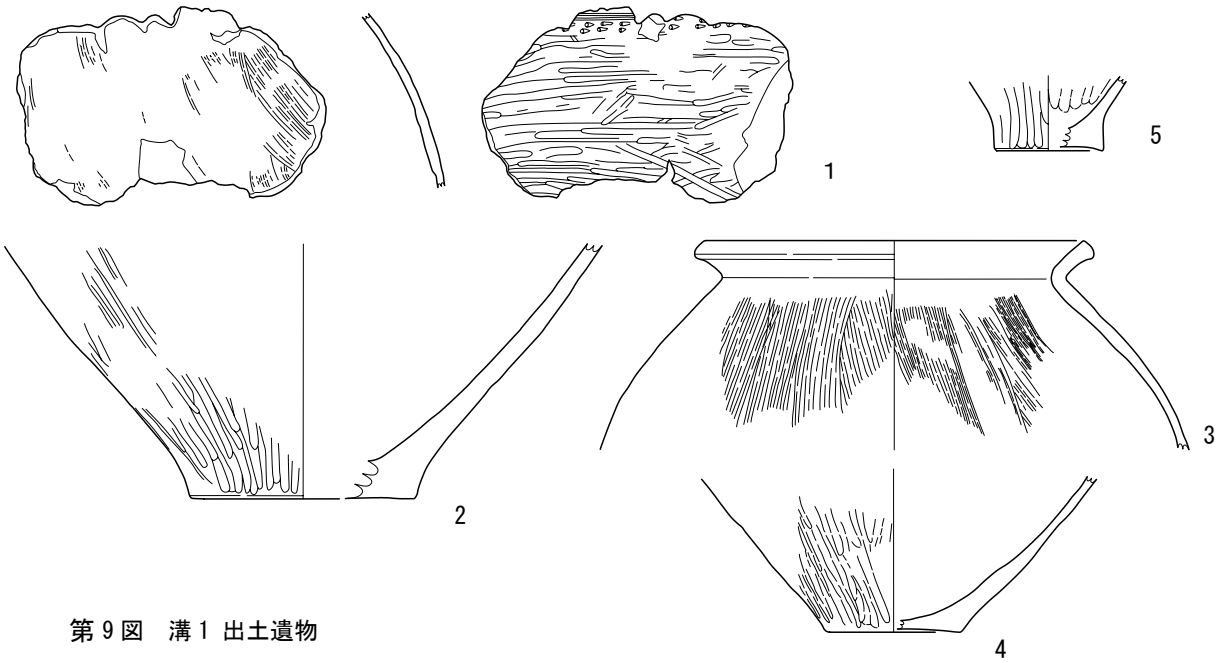
土　　層：３層に区分される。褐灰色シルトを主体とし、検出面にあたる第１層上面からは弥生土器の甕破片が集中して出土した（写真 11、実測３・４）。最下層にあたる第３層は砂質粘土がラミナ状に含まれることから、かつては水が流れていたものと考えられる。

出土遺物：総点数 144 点、総重量 3,981 ｇが出土した。内訳は、弥生土器 83 点（3,953 ｇ）、土器極小破片 61 点（28 ｇ）である。弥生時代中期後葉頃の遺物を中心とする。

１・２は、弥生土器の壺である。１は胴部破片で、外面に櫛描直線文と刺突列点文が施されている。２は胴部下半から底部の破片で、１・２とも第１層上面付近から出土しており、同一個体と考えられる。

３～５は、弥生土器の甕である。３は口縁部から胴部の破片で、口縁の断面形状は「く」字状を呈し、下方に拡張して端面をつくっている。４は胴部下半から底部の破片で、３・４とも第１層上面の遺物集中部から出土しており、同一個体と考えられる。５は底部の破片で、内・外面ともにヘラミガキ調整されている。

遺構時期：出土した遺物から、遺構の廃絶時期は弥生時代中期後葉頃と考えられる。



第 9 図　溝 1 出土遺物

報告No	種別	器種	出土遺構	出土層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存	備　　考	色　　調
1	弥生土器	壺	溝1	上層	－	＞10.4	－	胴部のみ(一部)	外面ミガキ調整、櫛描直線文・刺突列点文あり。 内面ハケメ調整。実測№2と同一個体か。	内) 10YR8/3 浅黄橙 外) 10TR5/2 灰黄褐
2	弥生土器	壺	溝1	上層	－	＞13.5	＊12.0	底部～胴部1/4弱	外面ミガキ調整。内面調整不明。 底部外面に黒斑あり。実測№1と同一個体か。	内) 10YR7/2 にぶい黄橙 外) 10YR7/2 明褐灰
3	弥生土器	甕	溝1	上層	＊21.1	＞11.0	－	口縁部～胴部1/4弱	内・外面ハケメ調整、口縁部ナデ調整。 実測№4と同一個体か。	内) 10YR7/3 にぶい黄橙 内) 10YR8/2 灰白
4	弥生土器	甕	溝1	上層	－	＞8.3	7.2	底部のみ	外面ミガキ調整。内面磨滅のため調整不明。 外面に黒斑あり。実測№3と同一個体か。	内) 10YR8/3 浅黄橙 外) 10TR5/2 灰黄褐
5	弥生土器	甕	溝1	一括	－	＞3.0	5.3	底部のみ	内・外面ミガキ調整。 内・外面ともに黒斑あり。	内) 10YR6/2 灰黄褐 外) 10YR8/2 灰白

表 2　溝 1 遺物観察表　　※「＊」は推定値、「＞」は現存値

■溝２（第 10・11 図、表３、写真 12 ～ 13）

位　　置：調査区中央付近のＦ３グリッドに位置する。溝７と水田跡１に切られ、西側と東側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 4.91 ｍで、現地表面から約 1.1 ｍ下に位

置する東西方向の溝である。軸方向はN-75°-Eを示す。

形　　態：平面形は溝状で、断面形は凹字状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁面は急斜に立ち上がる。

規　　模：検出された範囲での長さは1.88mを測る。幅は1.34m、深さは0.48mである。

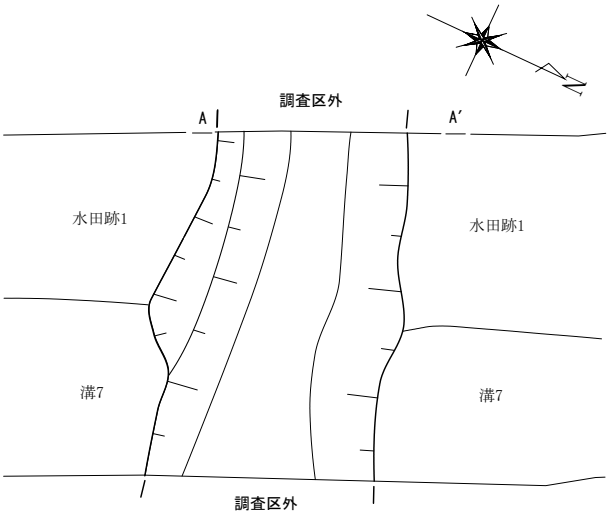
土　　層：４層に区分される。褐灰色シルトを主体とし、全体的に粘性が強い。

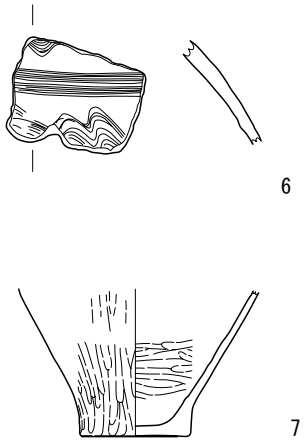
出土遺物：総点数20点、総重量534ｇが出土した。すべて弥生土器である。主に弥生時代中期の遺物である。

６は、弥生土器の壺である。胴部破片で、外面に櫛描波状文・櫛描直線文が交互に施されている。

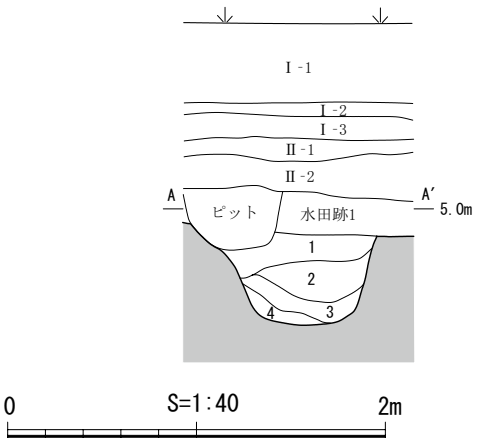
７は、弥生土器の甕である。胴部下半から底部の破片で、器厚は薄く、内・外面ともにヘラミガキ調整されている。

遺構時期：出土した遺物から、遺構の廃絶時期は弥生時代中期頃と考えられる。





第 11 図　溝 2 出土遺物



1．黒褐色シルト層。炭化物を少量、粘土ブロックを微量含む。マンガン粒を少量含む。粘性・締まり共にあり。
2．黒褐色粘土質シルト層。炭化物を微量含む。粘性強く、締まりやや弱い。
3．褐灰色粘土質シルト層。炭化物を微量含む。粘性・締まり共にあり。
4．褐灰色粘土質シルト層。炭化物を微量、粘土ブロックを少量含む。粘性・締まり共にあり。

第 10 図　溝 2 平面及び断面図

報告No	種別	器種	出土遺構	出土層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存	備　　考	色　　調
6	弥生土器	壺	溝２	一括	－	>6.2	－	胴部破片	内・外面調整不明。外面に櫛描波状文・櫛描直線文あり。	内) 10YR7/1 灰白 外) 10YR6/2 灰黄褐
7	弥生土器	甕	溝２	一括	－	>7.8	5.8	底部のみ	内・外面ミガキ調整。 内面に煤付着。外面に黒斑あり。	内) 10YR6/1 褐灰 外) 10YR7/2 にぶい黄橙

表 3　溝 2 遺物観察表

※「*」は推定値、「>」は現存値

■溝３（第 12・13 図、表 4、写真 2・3、14）

位　　置:調査区やや北寄りのＤ２・Ｅ２グリッドに位置する。溝６・溝７に切られ、水田跡１を切る。遺構の西側と東側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 5.15 ｍで、現地表面から約 0.9 ｍ下に位置する東西方向の溝である。軸方向は N-28°-E を示す。

形　　態：平面形は溝状で、断面形は逆台形状を呈する。底面は緩やかに湾曲し、壁面はおおむね急斜に立ち上がる。北側は急斜に立ち上がったのち、緩やかに外反しながら浅いテラス状平坦面を形成する。

規　　模：検出された範囲での長さは 3.40 ｍを測る。ただし、西側付近は調査区壁面が崩落する危険があったため完全には掘削していない。テラス状の平坦部を含めた最大幅は 3.24 ｍで、溝状の掘り込み部分のみでは 1.88 ｍを測る。深さは約 1.00 ｍである。

土　　層：７層に区分される。褐灰色シルトを主体とし、下層は全体的に粘性が強い。最下層にあたる第７層は、砂質土がラミナ状に含まれることから、かつては水が流れていたものと考えらえる。また、底面直上からは弥生土器の小破片が集中して出土した（写真 14）。

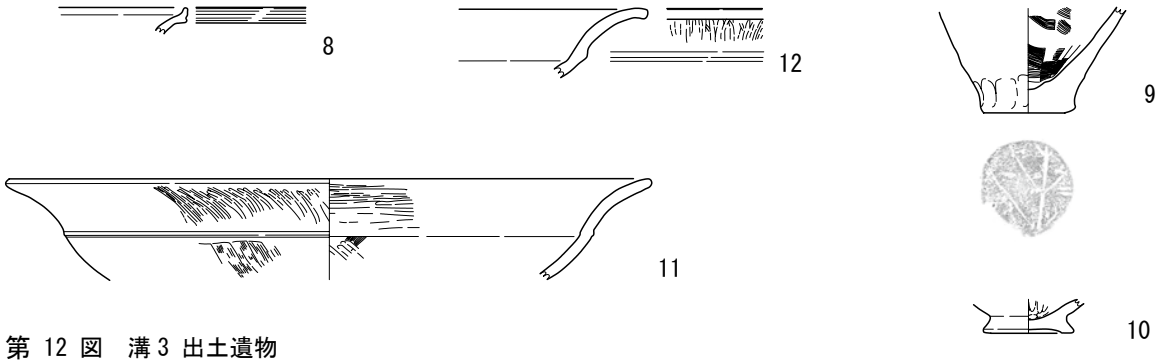
出土遺物：総点数 153 点、総重量 3,206 ｇが出土した。内訳は、弥生土器 150 点（3,198 ｇ）、石器２点（８ｇ）、土器極小破片１点（１ｇ以下）である。弥生時代後期後葉頃の遺物を中心とする。なお、石器はいずれもサヌカイト製の剥片である。

８・９は、弥生土器の甕である。８は口縁部の破片で、端部は上方に拡張され、外側に２条の凹線が巡る。９は、底部の破片で、下端部外面に成形の際の指頭痕、底面に木葉痕が残っている。

10 は、弥生土器の鉢である。脚台部の破片で、内面底部には指頭痕が残っている。

11・12 は、弥生土器の高杯である。いずれも口縁部の破片で、杯部との境に稜を持つ。

遺構時期：出土した遺物から、遺構の廃絶時期は弥生時代後期後葉～古墳時代初頭頃と考えられる。

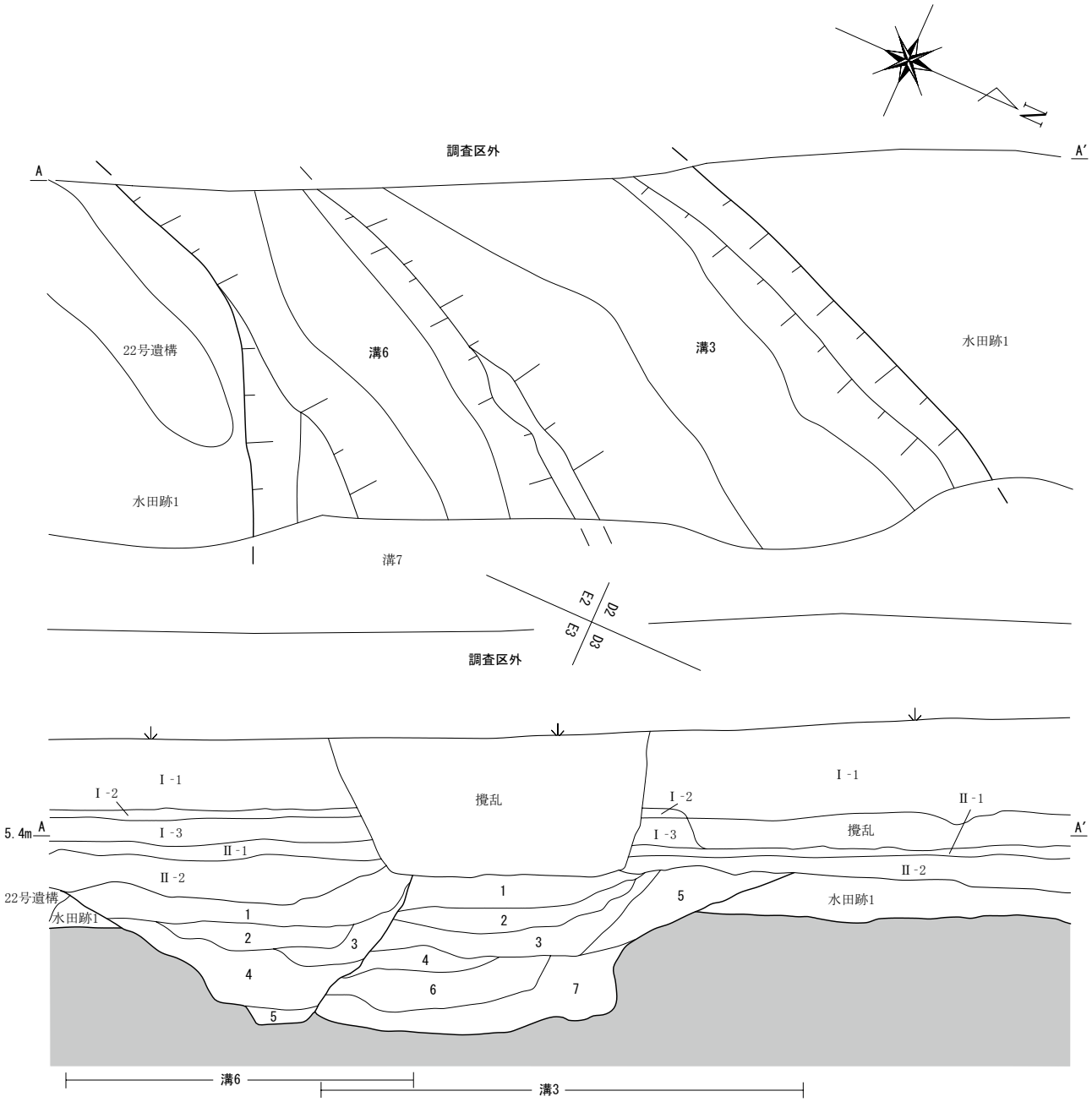


第 12 図　溝 3 出土遺物

報告No	種別	器種	出土遺構	出土層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存	備　　考	色　　調
8	弥生土器	甕	溝３	一括	－	>1.4	－	口縁部片	内・外面磨滅のため調整不明。口縁端部に凹線文２条あり。	内) 5YR7/3 にぶい橙 外) 5YR7/3 にぶい橙
9	弥生土器	甕	溝３	下層	－	>5.5	5.0	底部のみ	外面磨滅のため調整不明。下端部に指頭痕あり。底面に木葉痕あり。内面ハケメ調整。	内) 10YR7/1 灰白 外) 10TR7/2 にぶい黄橙
10	弥生土器	鉢	溝３	一括	－	>1.8	>4.8	底部のみ	外面ナデ調整。内面ミガキ調整、底部に指頭痕あり。	内) 10YR6/2 灰黄褐 外) 10YR3/1 黒褐
11	弥生土器	高杯	溝３	下層	＊33.9	>5.4	－	口縁部1/6	外面上半ミガキ調整、杯部ハケメ調整。内面上半ミガキ調整、杯部ハケメ後ミガキ調整。	内) 10YR7/2 にぶい黄橙 外) 10YR7/3 にぶい黄橙
12	弥生土器	高杯	溝３	下層	－	>3.7	－	口縁部1/8	外面ミガキ調整、ナデ調整。内面磨滅により調整不明。	内) 7.5YR8/3 浅黄橙 外) 7.5YR8/3 浅黄橙

表 4　溝 3 遺物観察表

※「＊」は推定値、「>」は現存値



溝３

1．黒褐色シルト層。炭化物を微量、酸化した鉄分を少量含む。マンガン粒を微量含む。粘性あり、締まり強い。
2．灰黄褐色シルト層。炭化物を微量、酸化した鉄分を少量含む。粘性・締まり共にあり。
3．褐灰色シルト層。炭化物を微量、粘土ブロックを少量、酸化した鉄分を中量含む。粘性・締まり共にあり。
4．褐灰色粘土質シルト層。炭化物を微量、粘土ブロックを中量含む。粘性強く、締まりやや弱い。
5．黒褐色シルト層。炭化物を微量、粘土ブロックを微量、酸化した鉄分を少量含む。粘性やや弱く、締まりあり。
6．灰色粘土質シルト層。炭化物を微量含む。粘性強く、締まり弱い。
7．褐灰色粘土質シルト層。炭化物を微量、細粒砂を少量含む。砂は一部ラミナ状に堆積する。粘性強く、締まりやや弱い。

溝６

1．黒褐色シルト層。焼土を微量、炭化物を中量、酸化した鉄分を少量含む。マンガン粒を中量含む。粘性・締まり共にあり。
2．灰黄褐色シルト層。焼土を微量、炭化物を少量、酸化した鉄分を少量含む。マンガン粒を少量含む。粘性・締まり共にあり。
3．褐灰色粘土質シルト層。炭化物、粘土ブロックを微量含む。粘性強く、締まりやや弱い。
4．黒褐色粘土質シルト層。炭化物、粘土ブロックを微量含む。粘性強く、締まりやや弱い。
5．褐灰色粘土質シルト層。炭化物を少量、粘土ブロックを微量含む。植物遺体を含む。粘性強く、締まりやや弱い。

0　S=1:40　2m

第 13 図　溝３・溝６ 平面及び断面図

■溝４（第 14・15 図、表 5、写真 15 ～ 17）

位　　置：調査区北側のＣ２・Ｄ２グリッドに位置する。溝７に切られ、水田跡１を切る。遺構の西側と東側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 5.10 ｍで、現地表面から約１ｍ下に位置する。軸方向は、西側と東側で異なり、西側では N-53°-W、東側では N-79°-W を示す。

形　　態：平面形は溝状で、やや湾曲して掘られている。断面形はやや不整形なＵ字状を呈する。底面は緩やかに湾曲し、壁面は急斜に立ち上がる。

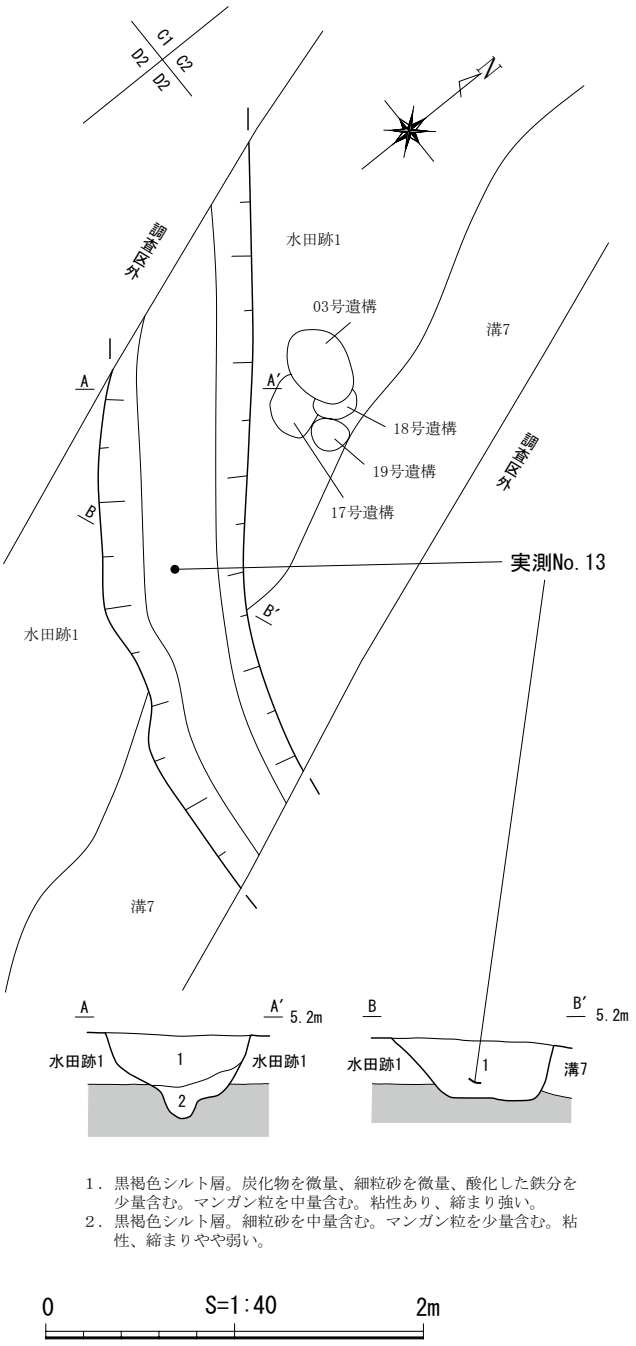
規　　模：検出された範囲での長さは 3.03 ｍを測る。幅は 0.87 ｍで、深さは 0.45 ｍを測る。

土　　層：２層に区分される。黒褐色シルトを主体とし、最下層にあたる第２層から弥生土器の鉢が出土した（写真 17、実測 13）。

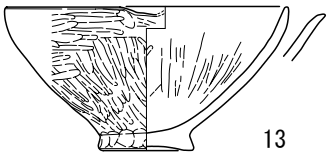
出土遺物：総点数 25 点、総重量 445 ｇが出土した。種別を判別できなかった土器極小破片１点（１ｇ以下）以外はすべて弥生土器である。弥生時代後期後葉頃の遺物を中心としている。

13 は、弥生土器の鉢である。口縁部に注口を持つ。底部には低い脚台が付いている。

遺構時期：出土した遺物から、遺構の廃絶時期は弥生時代後期後葉～古墳時代初頭頃と考えられる。



第 14 図　溝 4 平面及び断面図



第 15 図　溝 4 出土遺物

報告No	種別	器種	出土遺構	出土層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存	備　　考	色　　調
13	弥生土器	鉢	溝４	下層	＊14.9	7.7	5.1	1/2	外面口縁部ヨコナデ調整、胴部ミガキ調整、底部外周に指頭痕あり。 内面ミガキ調整。外面に黒斑あり。	内) 10YR7/3 にぶい黄橙 外) 7.5YR7/2 明褐灰

表 5　溝 4 遺物観察表

※「＊」は推定値、「>」は現存値

■水田跡１（第 6、16・17 図、表 6、写真 4・5、18・19）

位　　置:調査区北端と南側を除く、グリッドＣラインからＪラインにかけて位置する。溝３～溝７、３号（ピット）・４号（ピット）・16 号（性格不明）・17 号～ 21 号（ピット）・22 号遺構（溝）に切られ、溝２を切る。また、遺構の西側は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高約 5.00 ｍで、現地表面から約 0.9 ｍ下に位置する。軸方向は、検出範囲での長軸で N-20°-W を示す。

形　　態：検出範囲が狭いため明確な畦畔は把握できなかったが、Ｇ３グリッドの調査区際で畦畔の痕跡と考えられる高まりを確認した。また、北側と南側で水田範囲の立ち上がりを確認した。断面の観察から、大きく２～３面の水田跡と推測される。最上面において、農作業時に残されたと考えらえる足跡が複数確認された（第 17 図、写真５）。

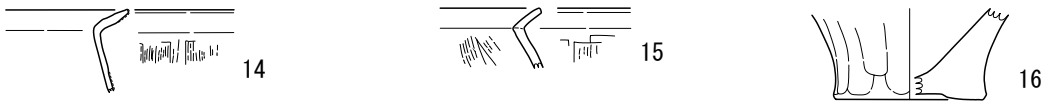
規　　模：畦畔部分を含めた検出範囲全体の規模は、長辺 35.95 ｍ×短辺 2.05 ｍを測る。畦畔は、遺構南端部から 10.75 ｍの位置で確認され、幅約 0.5 ｍを測る。水田面の西側への広がりは不明であるが、今回調査前に実施された確認調査では、西側約 20m の地点では水田跡は確認されなかった。水田層上面から最下部の地山面上までの深さは 0.50 ｍを測り、その間に少なくとも２～３面の水田面が存在したものと考えられる。

土　　層：３層に区分され、一定期間この地で営農活動が行われたものと考えられる（第 6 図）。灰黄褐色シルトを主体とし、検出範囲の北側では１～２層の、南側では３層の水田堆積を確認した。断面の観察では、最上位の水田層にあたる第１層は、Ｅ７グリッドで検出された畔を覆って堆積しており、一連の活動の中で区画の変化があったことを想起させる。足跡は、第１層上面の複数個所で確認されており、いずれも褐灰色シルトを主体としていた。なお、これらの土層に対するプラントオパール等の科学分析は実施していない。

出土遺物:総点数 20 点、総重量 2,508 ｇが出土した。内訳は、弥生土器 17 点（426 ｇ）、石器１点（３ｇ）、礫１点（2,079 ｇ）、土器極小破片１点（１ｇ以下）である。主に弥生時代中期から後期の遺物が出土した。なお、石器はサヌカイト製の剥片である。

14 ～ 16 は、弥生土器の甕である。14・15 は口縁部の破片で、器厚が薄く、断面形状は「く」字状を呈する。16 は底部の破片で、内・外面とも著しく被熱している。

遺構時期：出土した遺物と各遺構との切り合い関係から、弥生時代中期から後期頃にかけて営まれた水田跡と考えられる。

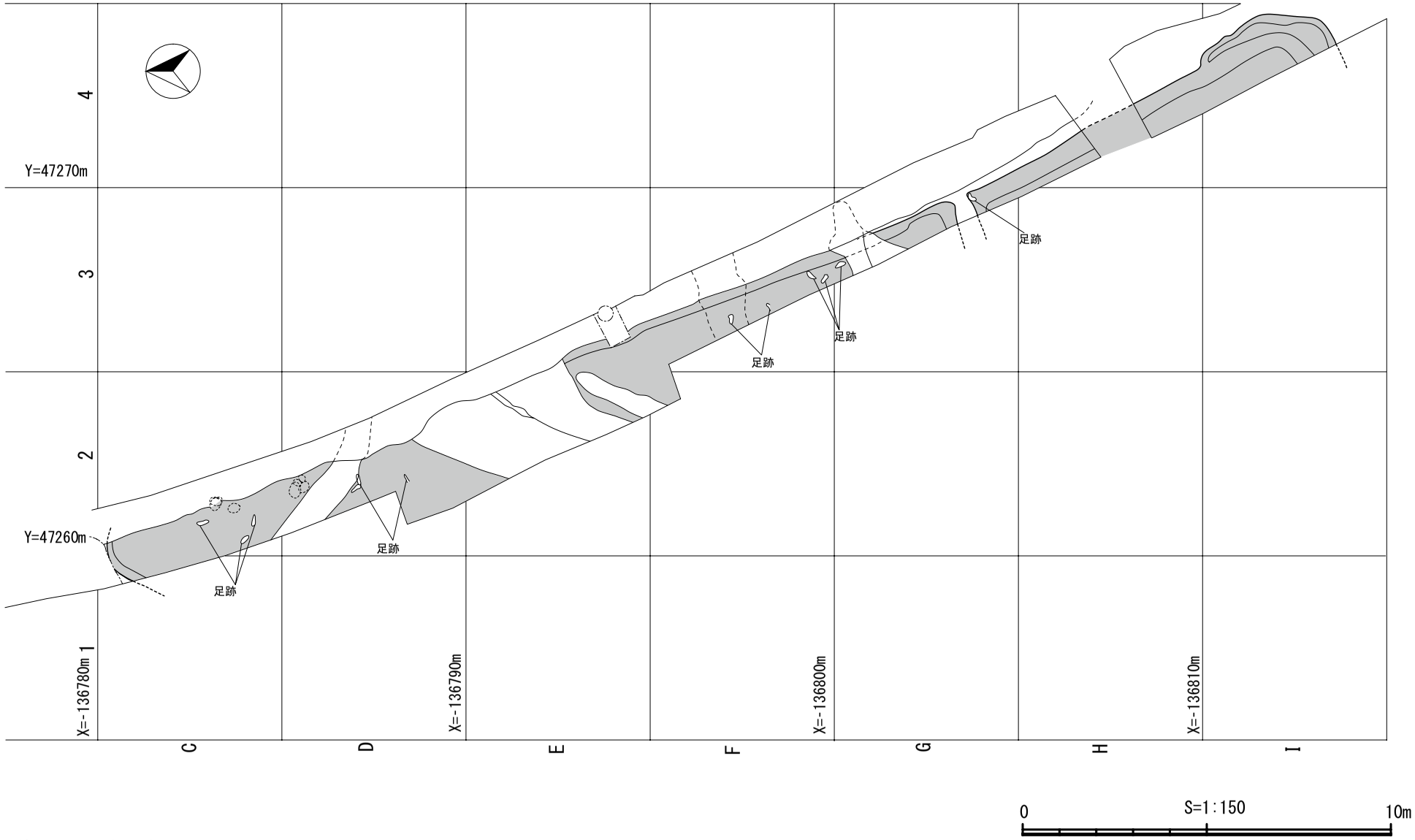


第 16 図　水田跡 1 出土遺物

報告No	種別	器種	出土遺構	出土層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存	備　　考	色　　調
14	弥生土器	甕	水田跡１	一括	－	>4.4	－	口縁部1/8以下	外面ハケメ調整。 内面磨滅により不明。	内) 10YR8/1 灰白 外) 10YR8/2 灰白
15	弥生土器	甕	水田跡１	一括	－	>3.1	－	口縁部1/16	口縁部ナデ調整。内・外面ハケメ調整。	内) 10YR8/2 灰白 外) 10YR8/2 灰白
16	弥生土器	甕	水田跡１	一括	－	>4.8	＊7.8	底部1/3	外面ユビナデ調整か。著しく被熱。 内面調整不明。	内) 10YR5/2 灰黄褐 外) 2.5YR5/8 明赤褐

表 6　水田跡 1 遺物観察表

※「＊」は推定値、「>」は現存値



第 17 図　水田跡 1 平面図

第４節　古墳時代の遺構と遺物

■溝５（第 18・19 図、表 7、写真 20・21）

位　　置：調査区中央付近のＧ３グリッドに位置する。溝７に切られ、水田跡１・16 号遺構（溝）を切る。遺構の西側は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 5.13 ｍで、現地表面から約 0.8 ｍ下に位置する東西方向の溝である。軸方向は N-72°-E を示す。

形　　態：平面形は溝状で、東側は調査区壁際で収束している。断面形はＶ字状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁面は急斜に立ち上がる。

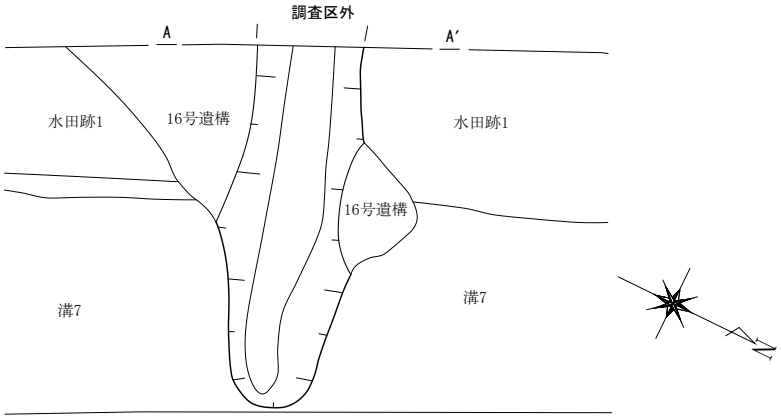
規　　模：検出された範囲での長さは 1.92 ｍを測る。幅は 0.71 ｍで、深さは 0.63 ｍを測る。

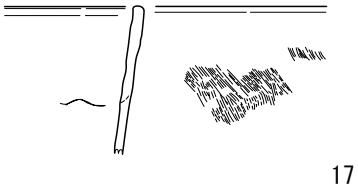
土　　層：３層に区分される。黒褐色シルトを主体とし、第２層から土師器甑などの破片が出土した（実測 17）。

出土遺物:総点数 12 点、総重量 286 ｇが出土した。内訳は、土師器 11 点（226 ｇ）、須恵器１点（60 ｇ）である。主に古墳時代後期の遺物が出土した。

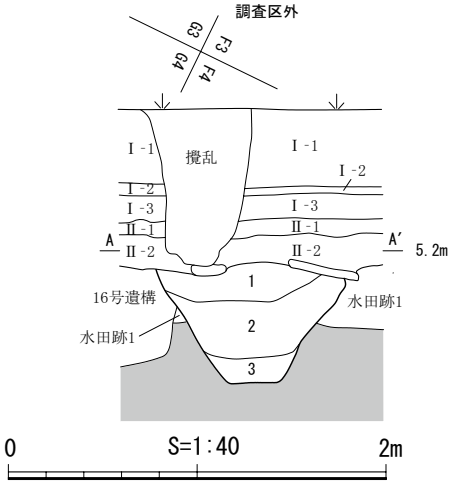
17 は、土師器の甑である。口縁部の破片で、口縁内側がわずかに窪んでいる。

遺構時期：遺物量は少ないものの、遺構の廃絶時期は古墳時代後期頃と考えられる。





第 19 図　溝 5 出土遺物



1．暗褐色シルト層。焼土を微量、炭化物を微量、粘土ブロックを微量、酸化した鉄分を少量含む。マンガン粒を中量含む。粘性あり、締まり強い。
2．黒褐色シルト層。炭化物、粘土ブロック、酸化した鉄分を微量含む。粘性・締まり共にあり。
3．褐灰色粘土質シルト層。炭化物を微量、粘土ブロックを少量含む。粘性強く、締まりやや弱い。

第 18 図　溝 5 平面及び断面図

報告No	種別	器種	出土遺構	出土層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存	備　　考	色　　調
17	土師器	甑	溝５	一括	－	>7.9	－	口縁部1/8	外面ハケメ調整。 内面磨滅のため調整不明。	内) 10YR8/2 灰白 外) 10YR8/2 灰白

表 7　溝 5 遺物観察表

※「*」は推定値、「>」は現存値

■溝６（第 13、20・21 図、表 8・9、写真 2・3、22）

位　　置:調査区やや北寄りのＥ２・Ｅ３グリッドに位置する。溝７に切られ､溝３・水田跡１を切る。遺構の西側と東側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高約５ｍで、現地表面から約１ｍ下に位置する東西方向の溝である。軸方向はN-38°-E を示す。

形　　態：平面形は溝状で、断面形はＶ字状を呈する。底面は緩やかに湾曲し、壁面は急斜に立ち上がる。南東側は急斜に立ち上がったのち、テラス状の平坦面を形成し上端へ至る。

規　　模：検出された範囲での長さは 3.05 ｍを測る。ただし、西側付近は調査区壁面が崩落する危険があったため完全には掘削していない。テラス状の平坦部を含めた最大幅は 1.71 ｍで、溝状の掘り込み部分のみでは約 1.3 ｍを測る。深さは 0.76 ｍである。

土　　層：５層に区分される。褐灰色シルトを主体とし、第４層上面付近から比較的残存状況の良い遺物が複数出土した（写真 22、実測 21・26 など)。

出土遺物：総点数 89 点、総重量 4,892 ｇが出土した。内訳は、弥生土器２点（385 ｇ)、土師器 65 点（1,724 ｇ)、須恵器 20 点（1,959 ｇ)、石器１点（824 ｇ)、土器極小破片１点（１ｇ以下）である。古墳時代後期から終末期の遺物を中心としている。

18 は、弥生土器の壺である。広口壺の口縁部で、溝３からの混入品と考えられる。

19 は、土師器の壺である。直口壺の胴部～底部で、内面の頸部から胴部上半に粘土紐の輪積痕を明瞭に残している。

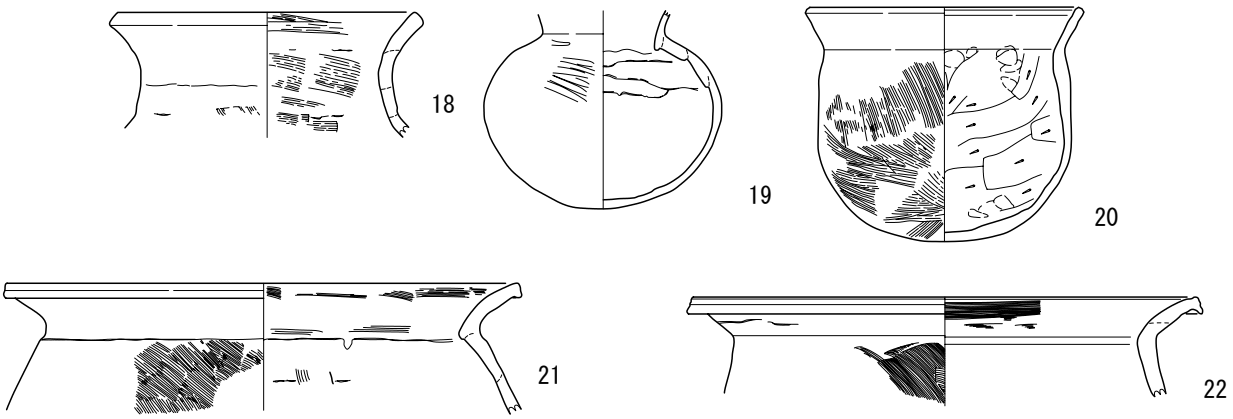
20 ～ 22 は、土師器の甕である。20 は器高 12.4 ㎝の小型の甕で、外面は口縁部から胴部にかけて煤が付着している。21・22 は口縁部から胴部上半の破片で、口縁端部をやや下方に拡張している。

23 ～ 25 は、須恵器の杯である。23・24 は杯蓋の破片で、ロクロ成形後天井部をヘラ切りし、ナデ調整している。24 は、外面の口縁部と天井部の境に段を有する。25 は杯身の破片で、ロクロ成形後底部をヘラ切りし、ナデ調整している。内面には自然釉が付着している。

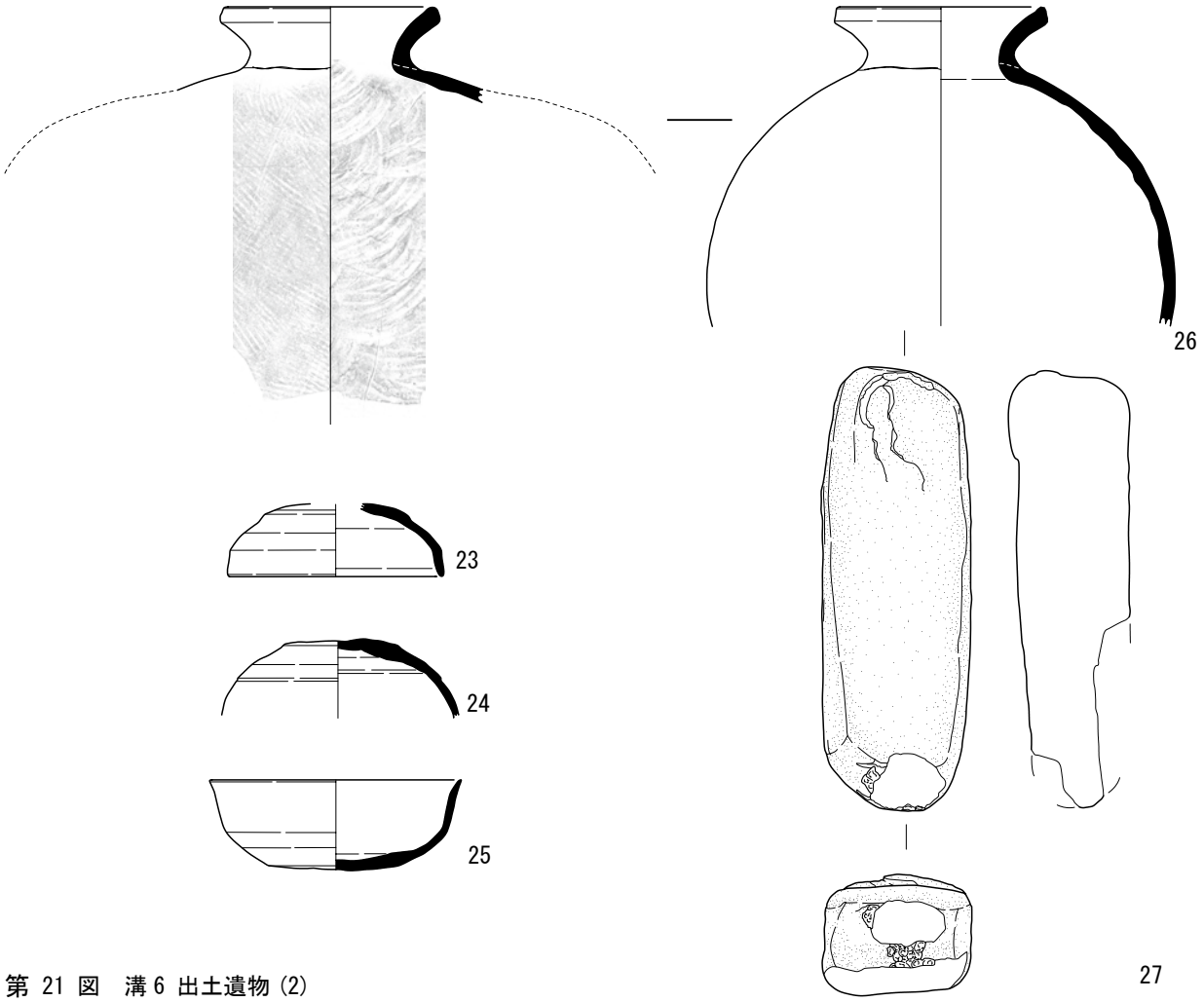
26 は、須恵器の横瓶である。丸みのある俵形を呈し、外面は格子状のタタキにより成形した後、粗くナデ調整している。

27 は、花崗岩質の敲石である。直方体に近い自然礫を利用している。敲打の結果、使用面を中心に欠損している。

遺構時期：出土した遺物から、遺構の廃絶時期は古墳時代終末期頃と考えられる。



第 20 図　溝 6 出土遺物 (1)



第 21 図　溝 6 出土遺物 (2)

報告No	種別	器種	出土遺構	出土層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存	備考	色調
18	弥生土器	壺	溝6	一括	＊16.6	＞6.6	－	口縁部1/8	内・外面ハケメ調整。	内) 10YR7/2 にぶい黄橙 外) 10YR7/2 にぶい黄橙
19	弥生土器	壺	溝6	上層	－	＞10.5	－	口縁欠損 胴部4/5	外面ミガキ調整。 内面ナデ調整、胴部上半に輪積痕あり。	内) 10YR2/1 黒 外) 7.5YR8/3 浅黄橙
20	土師器	甕	溝6	一括	＊14.8	12.4	－	約1/2	外面ハケメ調整。内面ケズリ調整。内面に指頭痕あり。 外面に煤付着、内面にコゲ付着。	内) 7.5YR6/2 灰褐 外) 7.5YR7/2 明褐
21	土師器	甕	溝6	中層	＊27.4	＞6.7	－	口縁部1/5	外面口縁部ナデ調整、胴部ハケメ調整。 内面ハケメ調整後ナデ調整。	内) 2.5Y8/3 淡黄 外) 2.5Y8/3 淡黄
22	土師器	甕	溝6	上層	＊26.6	＞5.2	－	口縁部1/4	外面口縁部ナデ調整、胴部ハケメ調整。 内面ハケメ調整。	内) 10YR7/3 にぶい黄橙 外) 10YR7/2 にぶい黄橙
23	須恵器	杯蓋	溝6	下層	＊11.8	＞4.0	－	約1/3	内・外面ロクロ回転ナデ調整。 天井部ヘラ切り後ナデ調整。	内) 10YR8/1 灰白 外) 10YR8/1 灰白
24	須恵器	杯蓋	溝6	一括	－	＞4.4	－	口縁部欠損 胴部1/8	内・外面ロクロ回転ナデ調整。 底部ヘラ切り後ナデ調整。外面に段を有する。	内) 10YR8/2 灰白 外) 10TR7/1 灰白
25	須恵器	杯	溝6	一括	＊13.6	5.0	6.9	約1/3	内・外面ロクロ回転ナデ調整。 底部ヘラ切り後ナデ調整。内面に自然釉付着。	内) 5Y6/1 灰 外) 5Y7/1 灰
26	須恵器	横瓶	溝6	中層	＊11.9	＞17.3	－	口縁2/3 胴部一部	外面タタキ後に粗くナデ調整。 口縁部ロクロ回転ナデ調整。内面当具痕あり。	内) 2.5Y8/1 灰白 外) 2.5Y8/2 灰白

表 8　溝 6 遺物観察表（土器）

※「＊」は推定値、「＞」は現存値

報告No	器種	出土遺構	出土層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
27	敲石	溝6	中層	18.0	6.1	4.9	824	花崗岩	1/4程度欠損。

表 9　溝 6 遺物観察表（石器）

第５節　古代の遺構と遺物

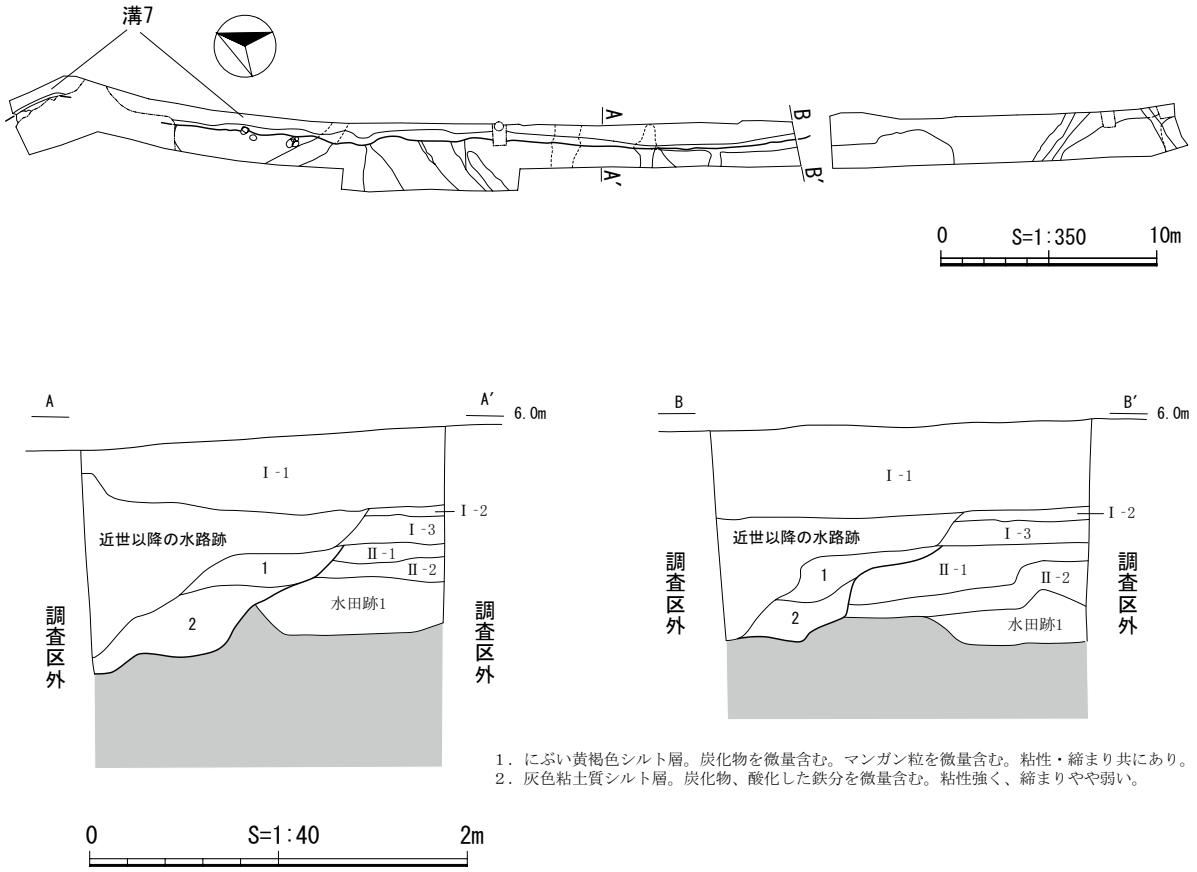
■溝７（第 22・23 図、表 10、写真 23 ～ 25）

位　　置：調査区東壁に沿って、グリッドＡラインからＨライン付近にかけて位置する。重複するすべての遺構を切っている。一部は攪乱に壊され、調査区東壁沿いは近世以降の水路跡に壊されている。遺構の北側と東側は、それぞれ調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 5.32 ｍで、現地表面から約 0.6 ｍ下に位置する。軸方向は、北側とそれ以外で異なり、北側では N-48°-W、それ以外の部分では N-23°-W を示す。

形　態：溝の過半が調査区外にあたるため全体形は不明だが、溝状を呈するものと考えられる。同様に断面形も明確ではないが、逆台形状を呈するものと考えられる。底面は緩やかに湾曲し、壁面は緩やかに外反しながら立ち上がる。

規　　模:検出された範囲での長さは 36.23 ｍを測る。検出範囲での最大幅は 1.31 ｍで､深さは 0.64 ｍを測る。

土　　層：２層に区分される。にぶい黄褐色シルトを主体とするが、大部分はその後の水路の掘削によって壊されている。今回調査において、基本層序のⅡ層面から検出された唯一の遺構である。



第 22 図　溝 7 平面及び断面図

出土遺物:総点数28点、総重量958ｇが出土した。内訳は、土師器17点(335ｇ)、須恵器10点(623ｇ)、土器極小破片１点（１ｇ以下）である。出土量が少なく、図化できたものは古墳時代前期の遺物であるが、須恵器の破片等は平安時代の遺物を主体としている。

28は、土師器の壺である。小型壺の口縁部破片で、内湾する形状を持ち、端部はナデて、三角形状に仕上げている。

29は、土師器の甕である。頸部に近い部分の胴部破片で、外面に細かいハケメ調整がなされている。

遺構時期：弥生時代から古墳時代の遺物包含層である基本層序第Ⅱ層を掘り込んで造られており、出土した須恵器の年代観から、遺構の廃絶時期は平安時代頃と推測される。また、その後も同じような位置に溝が掘られ水路として活用されたものと考えられ、現在もほぼ同様の軸線にコンクリート製の水路が設置されている。

第 23 図　溝 7 出土遺物

報告No	種別	器種	出土遺構	出土層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存	備　　考	色　　調
28	土師器	壺	溝7	一括	－	>2.0	－	口縁部片	内・外面磨滅のため調整不明。	内) 10YR8/2 灰白 外) 10YR8/2 灰白
29	土師器	甕	溝7	一括	－	>4.2	－	胴部破片	内・外面ハケメ調整。	内) 10YR8/3 浅黄橙 外) 2.5Y7/2 灰黄

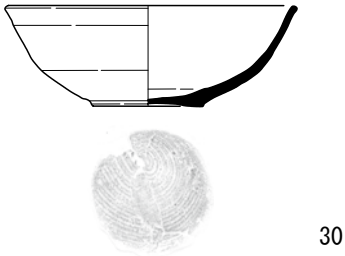
表 10　溝 7 遺物観察表

※「*」は推定値、「>」は現存値

■その他の遺物（第 24 図、表 11）

表土から出土した遺物のうち、復元図化が可能な遺物１点を図示した。

30は、須恵器の椀である。ロクロ成形後、底部を糸切りしている。



第 24 図　表土出土遺物

報告No	種別	器種	出土遺構	出土層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存	備　　考	色　　調
30	須恵器	椀	表土	-	*15.1	5.4	6.1	約3/5	内・外面ロクロ回転ナデ調整。 底部に糸切痕あり。	内) 5Y7/1 灰白 外) 5Y7/1 灰白

表 11　表土出土遺物観察表

番号	遺構名	遺構種別	グリッド	検出標高（m）	平面形	断面形	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	切合関係（新＞旧）
1	溝１	溝状遺構	J5、K5・6	4.90	溝状	U字状	＞5.42	0.80	0.40	09号＞溝1
2	溝２	溝状遺構	F3	4.91	溝状	凹字状	＞1.88	1.34	0.48	溝7＞水田跡1＞溝2
3	溝３	溝状遺構	D2、E2	5.15	溝状	逆台形状	＞3.40	＞3.24	1.00	溝7＞溝6＞溝3＞水田跡1
4	溝４	溝状遺構	C2、D2	5.10	溝状	U字状	＞3.03	0.87	0.45	溝7＞溝4＞水田跡1
5	溝５	溝状遺構	G3	5.13	溝状	V字状	＞1.92	0.71	0.63	溝7＞溝5＞16号＞水田跡1
6	溝６	溝状遺構	E2・3	5.00	溝状	V字状	＞3.05	1.71	0.76	溝7＞溝6＞溝3＞水田跡1
7	溝７	溝状遺構	A1・2、B2、C2、D2、E2・3、F3、G3・4、H4	5.32	溝状	逆台形状	＞36.23	＞1.31	0.64	溝7＞溝6・05号＞溝5＞ 溝3・溝4＞水田跡1＞溝2
8	水田跡１	水田跡	C1・2、D2、E2・3、F2・3、G3・4、H3・4、I4	5.00～5.08	-	-	＞35.95	＞2.05	0.49	溝7＞溝6＞溝5＞16号・ 22号＞溝3・溝4＞水田跡1 ＞溝2
9	03号遺構	ピット	D2	5.09	楕円形	U字状	0.43	0.30	0.45	03号＞水田跡1＞18号＞ 17号
10	04号遺構	ピット	C2	5.05	楕円形	凹字状	0.35	0.27	0.40	溝7＞04号＞水田跡1＞ 20号
11	05号遺構	性格不明	A1	4.61	不明	不明	＞0.79	＞0.30	0.37	溝7＞05号
12	07号遺構	溝状遺構	J5	4.86	溝状	逆台形状	＞2.74	0.48	0.15	
13	09号遺構	溝状遺構	K5	4.83	溝状	椀状	＞2.26	0.46	0.16	09号＞溝1・13号
14	11号遺構	欠番								
15	12号遺構	欠番								
16	13号遺構	性格不明	K5・6	5.00	不明	不明	＞1.43	＞0.97	0.62	09号＞13号
17	16号遺構	性格不明	F3、G3	5.14	不明	逆台形状	＞1.75	＞0.64	0.58	溝7＞溝5＞16号＞水田跡1
18	17号遺構	ピット	D2	4.78	楕円形	凹字状	0.34	0.21	0.20	03号＞水田跡1＞18号・ 19号＞17号
19	18号遺構	ピット	D2	4.77	楕円形	椀状	0.23	0.17	0.10	03号＞水田跡1＞18号＞ 17号
20	19号遺構	ピット	D2	4.78	円形	皿状	0.19	0.19	0.05	水田跡1＞19号＞17号
21	20号遺構	ピット	C2	4.75	楕円形	U字状	0.26	0.15	0.22	溝7＞04号＞水田跡1＞ 20号
22	21号遺構	ピット	C2	4.75	楕円形	凹字状	0.33	0.26	0.12	水田跡1＞21号
23	22号遺構	溝状遺構	E2、F2	5.12	溝状	逆台形状	＞2.40	0.57	0.33	22号＞水田跡1

表 12　遺構一覧表

※ ■は抽出遺構
※ ＞は現存値

番号	遺構名 (遺構種別)	出土層位	弥生土器	土師器	須恵器	石器	鉄製品	礫	土器極小破片	小計	合計	備考
			点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	
1	溝1 (溝状遺構)	上層	61						60	121	144	08号遺構
			3,359						28	3,387		
		一括	22						1	23	3,981	
			594						1以下	594		
2	溝2 (溝状遺構)	一括	20							20	20	14号遺構
			534							534	534	
3	溝3 (溝状遺構)	上層	2							2	153	06a号遺構
			237							237		
		下層	86			2			1	89		
			1,917			8			1以下	1,925	3,206	
		一括	62							62		
			1,044							1,044		
4	溝4 (溝状遺構)	下層	1							1	25	02号遺構
			160							160		
		一括	23						1	24	445	
			285						1以下	285		
5	溝5 (溝状遺構)	一括		11	1					12	12	15号遺構
				226	60					286	286	
6	溝6 (溝状遺構)	上層	1	33	2				1	37	89	06b号遺構
			300	401	71				1以下	772		
		中層		2	4	1				7		
				120	495	824				1,439		
		下層		19	3					22	4,892	
				739	604					1,343		
		一括	1	11	11					23		
			85	464	789					1,338		
7	溝7 (溝状遺構)	一括		17	10				1	28	28	01号遺構
				335	623				1以下	958	958	
8	水田跡1 (水田跡)	一括	17			1		1	1	20	20	10号遺構
			426			3		2,079	1以下	2,508	2,508	
9	03号遺構 (ピット)	底部	1							1	1	
			5							5	5	
10	04号遺構 (ピット)	一括	6			1		1	2	10	10	
			218			5		530	1	754	754	
11	05号遺構 (性格不明)	無								0	0	
										0	0	
12	07号遺構 (溝状遺構)	一括	5							5	5	
			69							69	69	
13	09号遺構 (溝状遺構)	無								0	0	
										0	0	
14	11号遺構	欠番										
15	12号遺構	欠番										
16	13号遺構 (性格不明)	一括		3	1					4	4	
				11	10					21	21	
17	16号遺構 (性格不明)	一括		23	2				4	29	29	
				197	99				1以下	296	296	
18	17号遺構 (ピット)	下層	1							1	1	
			419							419	419	
19	18号遺構 (ピット)	無								0	0	
										0	0	
20	19号遺構 (ピット)	底部	1					1		2	2	
			262					448		710	710	
21	20号遺構 (ピット)	一括	6						2	8	8	
			44						3	47	47	
22	21号遺構 (ピット)	一括	3							3	3	
			81							81	81	
23	22号遺構 (溝状遺構)	一括	3							3	3	
			25							25	25	
24	表土・攪乱	―	27	74	22		1			124	124	
			199	760	914		5			1,878	1,878	
25	合計	点数	349	193	56	5	1	3	74	681		
		重量(g)	10,263	3,253	3,665	840	5	3,057	32	21,115		

表 13　遺物集計表

※ ▒は抽出遺構

第Ⅲ章　まとめ

今回の発掘調査は、宅地開発において遺跡に影響のある範囲 120 ㎡について実施した。その結果、狭小な範囲での調査ながら、弥生時代から平安時代までの遺構が合計 21 基検出された。本稿では、今回検出された遺構を時期ごとに整理し、さらに過去の近隣での調査結果を検討して、溝之口遺跡の中における今回調査で検出した遺構の位置付けを行ってまとめとしたい。

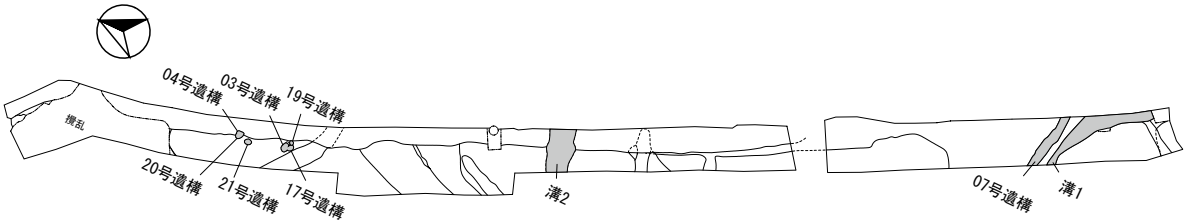
なお、今回の調査は面積が狭く、遺物の出土量も少ないため、遺構の明確な時期比定を行うことができなかった。このため、大まかな変遷ではあるが、弥生時代中期、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代後期、古代（平安時代）の各時期を設定して、既往の調査における遺構の検出状況を概観し、今回調査した遺構の性格についての検討を試みる（第 25 図）。

弥生時代中期　弥生時代中期における周辺での調査をみると、今回調査地の北側で行われたＡ地点において、調査地北西寄りの位置から中期中葉～後葉にかけての竪穴建物跡や土坑が検出されており、居住域として土地利用されていたようである（第 26 図、表 14）。しかし、南東寄りでは土坑が１基検出されたのみで、居住域が今回調査地側へ続かないことがわかる。現在の地形も、Ａ地点から今回調査地へは緩やかな降り勾配となっており、微高地から低地部への変化として読み取れる。Ａ地点よりさらに北側のＢ地点においては、中期中葉頃の土器が多量に出土した土坑や木棺墓が検出され、Ａ・Ｂ地点周辺が居住域や小規模な墓域として利用されていたことが明らかになっている。また、中期後葉には、今回調査地の北東方に位置する舌状の微高地上において、方形周溝墓や円形周溝墓が多数検出されており（Ｅ･Ｈ･Ｊ･Ｋ･Ｌ地点）、この場所が墓域として利用されたことが明らかになっている。このＡ・Ｂ地点とＥ・Ｈ・Ｊ・Ｋ・Ｌ地点の間で行われたＩ・Ｃ・Ｄ地点の調査では、弥生時代中期の明確な遺構は検出されず、Ｄ地点で水田跡を検出していることから、これらの調査地点は微高地間の谷状の低湿地であったと考えられる。

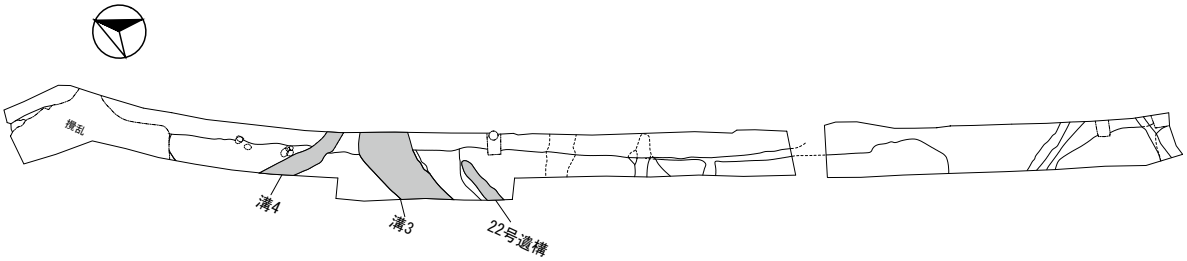
このような弥生時代中期における遺構の状況と微地形の様相から、今回調査地点における検出遺構の性格は以下のように位置付けられる。

今回調査地における中期の遺構配置は、北側でピットが密集し、調査区の中央に溝２が、南東部に溝１が位置している（第 25 図）。溝１は、やや円弧状の平面形を持つ溝で、埋土の上層からは壺や甕の破片がまとまって出土した。溝１周辺から南側の土地は、北側に比べやや高くなっていることから、今回調査地の南側には別の微高地が存在する可能性が考えられ、その場合、溝１の埋没時にまとまった遺物が混入している状況などから、この微高地上にも居住域が存在した可能性が考えられる。溝１以外の遺構は、Ｉ・Ｃ・Ｄ地点同様の低湿地内に残された遺構で、流路や杭跡の可能性が考えられる。

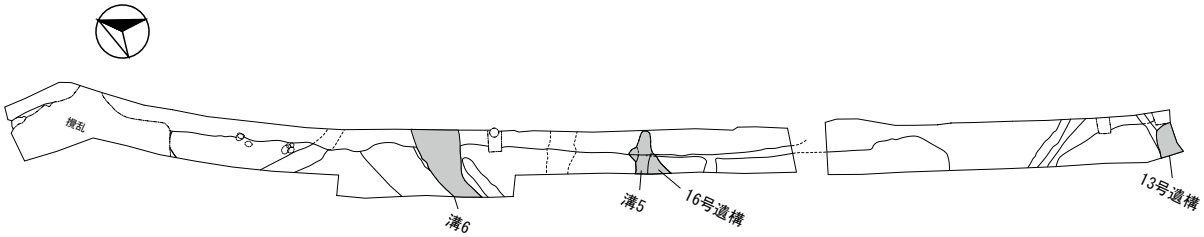
今回の調査で検出された水田跡１は、溝２やピットの埋没後に成立しており、後述する後期後葉の遺構に切られていることから、比較的限定された期間に営まれたと考えられる。Ｄ地点の水田が弥生時代から古墳時代まで継続することとは異なった様相を示す。しかし、比較的短期間とはいえ、今回調査地においては最も活発に土地利用された時期といえるかもしれない。



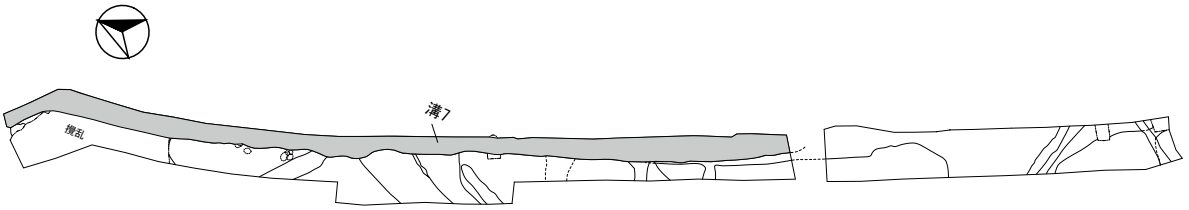
弥生時代中期



弥生時代後期～古墳時代初頭



古墳時代後期



平安時代

第 25 図　時期別の遺構変遷

弥生時代後期～古墳時代初頭　弥生時代後期における周辺での調査をみると、Ａ地点に加えてＢ地点・Ｃ地点においても竪穴建物跡が検出されており、引き続き今回調査地点の北西部に居住域が形成されている。ただし、これらの遺構の時期は、後期後葉を中心としており、中期からの連続性は認められない。また、中期後半に墓域を形成していた東側の微高地では、M地点において竪穴建物跡が１棟検出されているのみで、後期後半における土地利用の痕跡がほとんど確認できなくなる。

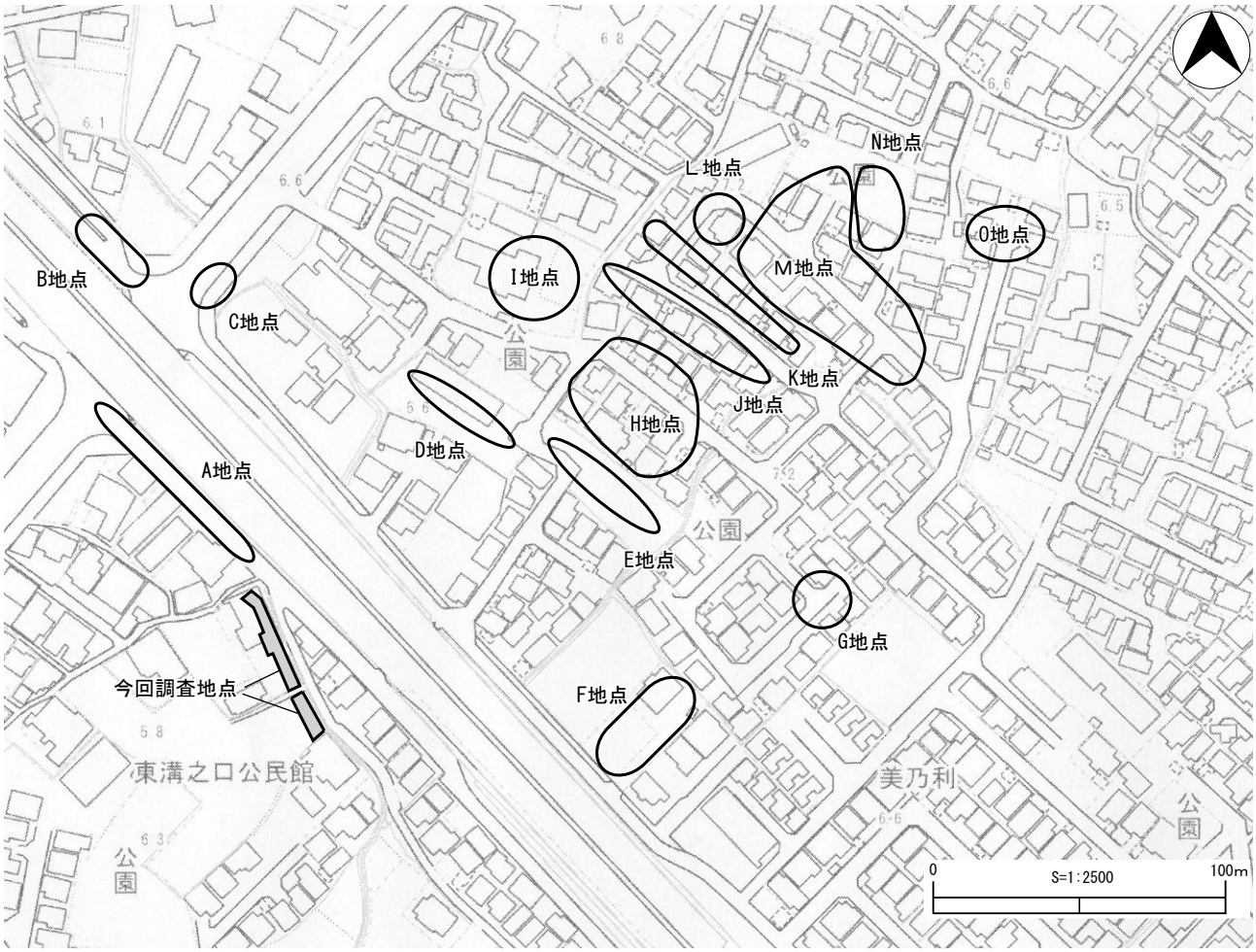
このような周辺の状況の中で、今回の調査区における該期の遺構を見ると、水田跡１を切る大型の溝３が調査区の北部にあって、Ａ・Ｂ・Ｃ地点に形成された居住域を区画する溝である可能性が考えられる。

古墳時代後期　古墳時代後期における周辺での調査をみると、Ａ地点で古墳時代前期の竪穴建物跡が検出されており、居住域が弥生時代から引き継がれていたことがわかる。しかしながら、中期以降の遺構をみると、長らく居住域として利用されてきたＡ・Ｂ地点では、後期の溝が検出されたのみで竪穴建物跡は検出されていない。この時期の居住域は、かつて方形周溝墓があった東側の微高地に移動しており、Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｍ・Ｏ地点で竪穴建物跡や溝が検出されている。これらの遺構は、調査した面積に比して検出数が少なく、微高地上に広範囲に点在していることが特徴的である。

このような古墳時代後期の状況のなかで、今回調査区の遺構には、水田跡１や溝３を切る大型の溝６がある。断面はＶ字状を呈し、埋土内からは古墳時代中期から後期のまとまった遺物が出土している。この溝は、埋没土層の堆積状況から、人為的に埋められたものと考えられる。溝６以外の溝５と16 号遺構は、溝５が 16 号遺構を切り、両者は軸線を異にするものの、どちらも東側に溝が続いていない。両者とも調査区の西側に展開する遺構と考えれば、溝６の存在や埋没状況も含めて、今回調査区の西側に別の居住域が存在した可能性が考えられる。今後の調査事例の増加に期待したい。

古代　古代における周辺での調査をみると、今回調査においては遺構が確認されなかった奈良時代の遺構・遺物が、東側の微高地上を中心に広範囲かつ高密度に検出されている。掘立柱建物の規模や配置、出土する遺物の性格などが官衙的要素を強く持っていることから、溝之口遺跡を「賀古郡衙」の推定地とする根拠となっている。これに対して、平安時代の遺構は、Ａ地点やＥ地点で掘立柱建物跡が検出され、Ｇ・Ｊ・Ｎ地点から溝が検出されているに過ぎない。このことから、今回調査地周辺における平安時代は、奈良時代に比べて急激に規模が縮小し、集落の立地場所が南側に移るという現象が窺える。検出される建物の規模や出土遺物の面からも官衙的要素がなくなり、一般的な集落として土地利用されたものとみられる。

こうした状況のなか、今回の調査地点においては平安時代の遺構として溝７がある。溝７は、今回検出した他の大部分の溝が踏襲していた東西方向の軸線とは全く異なる南北方向を主軸とした溝である。検出の状況は、重複するほぼ同位置に近世以降の溝があり、さらにその溝は現在のコンクリート製水路に切られているという状況である。これまで見てきた他の溝が自然地形に沿って掘られているとすれば、溝７は別の基準で造られたものと考えられる。このようにみれば、溝７は『加古川市史』第１巻において地図上で検討復元された今回調査地周辺における条里型地割に重なり、奈良時代以降に施工された条里制に基づく地割に伴う水路と考えられる。



第 26 図　周辺の調査地点

以上、今回調査における遺構の変遷と、周辺でのこれまでの調査結果を比較しながら、当該地周辺における集落の構造や変化について考えてみた。

今回調査地点については、弥生時代の中期中葉から後期後葉にかけて水田が営まれた可能性があったことがわかり、それ以外の時期はいずれも活発な土地利用の痕跡は見いだせないものの、いまだ確認されていない別の居住域の存在を示唆するような遺構配置が確認できた。古代以降は、条里地割の中に組み込まれ、現在まで残る水路区画が成立したものと考えた。

周辺の調査結果の検討では、時期によって集落の展開状況が大きく変化することがより明確になったといえる。特に、それぞれの微高地上における変化は急激で、いくつかの大きな画期があったことが見えてきた。従来から指摘されてきた明確な画期としては、奈良時代に大型の掘立柱建物をはじめとする官衙的な施設が出現することであるが、それ以外にも、弥生時代後期前半段階の竪穴建物跡が検出されないことや、中期に周溝墓が多数検出された墓域がその後消滅するという変化、古墳時代中期に明確な遺構が確認されず、後期には居住域の位置や在り方がそれまでと大幅に変わることなどである。近年実施された調査では、Ｉ地点やＬ地点のさらに北側で、多数の土器が供献された円形もしくは方形の周溝墓の一部と考えられる溝なども検出されており、弥生時代中期の墓域についても再検討する必要が出てきている。

今回は、溝之口遺跡全体のうち、今回調査地点より北側で行われた過去の調査を比較の対象とした

地点名	弥生時代 中期	弥生時代 後期	古墳時代 後期	平安時代	左記以外の時期	掲載 報告書名	年次別 調査区名
今回 調査地点	溝・ピット・ 水田跡	溝	溝・ 性格不明遺構	溝	－	本書	－
A地点	竪穴建物跡・ 土坑	竪穴建物跡	－	掘立柱建 物跡	古墳時代前期の竪穴建物跡	『播磨・東溝弥生遺跡Ⅱ』加古川市教育委員会　1969	－
B地点	木棺墓・土坑	竪穴建物跡	溝	－	中世の溝	『播磨・東溝弥生遺跡Ⅰ』加古川市教育委員会　1968	－
C地点	－	竪穴建物跡	－	－	－	『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅰ』加古川市教育委員会 1992	昭和62年度 ３次
D地点	－	－	－	－	弥生～古墳時代の水田跡	未刊	平成４年度 １区
E地点	方形周溝墓	－	－	掘立柱建 物跡	－	『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅱ』加古川市教育委員会 2006	平成４年度 ２区
F地点	－	－	－	－	弥生～古墳時代の水田跡	未刊	平成４年度 ３区
G地点	土坑	－	－	溝	古墳時代の竪穴建物跡、奈良時代後期の掘立柱建物跡	C地点に同じ	昭和62年度 １次東
H地点	方形周溝墓・ 土坑・溝	－	竪穴建物跡	－	奈良時代後期の掘立柱建物跡	C地点に同じ	昭和58年度 １次
I地点	－	溝	－	－	古墳時代の溝、奈良時代後期の溝・水田跡	C地点に同じ	昭和63年度
J地点	方形周溝墓・ 円形周溝墓	－	竪穴建物跡	溝	弥生時代前期の土坑、古墳時代の溝、奈良時代の掘立柱建物跡・柵列	C地点に同じ	昭和62年度 ２次
K地点	土坑・溝	－	竪穴建物跡・ 溝	－	古墳時代の竪穴建物跡、奈良時代後期の掘立柱建物跡	C地点に同じ	昭和61年度
L地点	方形周溝墓	－	－	－	奈良時代後期の掘立柱建物跡・溝	C地点に同じ	昭和62年度 １次西
M地点	竪穴建物跡	竪穴建物跡	－	－	古墳時代の竪穴建物跡・掘立柱建物跡、奈良時代の掘立柱建物跡	C地点に同じ	昭和58年度 ２次１区
N地点	－	－	－	溝	奈良時代の掘立柱建物跡・井戸	C地点に同じ	昭和58年度 ２次２区
O地点	－	－	竪穴建物跡	－	弥生時代の竪穴建物跡、奈良時代の掘立柱建物跡・井戸・溝	C地点に同じ	昭和58年度 ２次３区

表 14　周辺の調査地点

が、遺跡の南側や近隣の関連遺跡も含め、改めて過去の調査結果を見直し、新たな調査事例なども考慮に入れながら、今後も溝之口遺跡の実像について検討していきたい。

最後に、調査と整理に助力と援助をくださった多くの方々と、調査へ参加したすべての皆さまに心よりお礼申し上げます。

引用・参考文献

石野博信・松下　勝ほか　1968 『播磨・東溝弥生遺跡Ⅰ』加古川市教育委員会
石野博信・松下　勝ほか　1969 『播磨・東溝弥生遺跡Ⅱ』加古川市教育委員会
岡本一士ほか　1992 『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅰ』加古川市教育委員会
加古川市史編さん専門委員　1996 『加古川市史　第四巻』加古川市
篠宮　正　2006 「加古川下流域左岸の遺跡動向」『溝之口遺跡』兵庫県教育委員会
西川英樹　2006 『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅱ』加古川市教育委員会
松下　勝　1984 「加古川流域の遺跡」『日本の古代遺跡３　兵庫南部』保育社
渡辺　昇　2009 「Ⅶおわりに」『坂元遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会

図　版

写真 6　遺構検出状況（北東から）

写真 7　遺構検出状況（南から）

図版 2

写真 8　溝 1　完掘（西から）

写真 9　溝 1（右）・07 号遺構（左）　検出状況（南西から）

写真 10　溝 1　土層断面（西から）

写真 11　溝 1　遺物出土状況（北西から）

写真 12　溝 2　完掘（東から）

写真 13　溝 2　土層断面（北東から）

写真 14　溝 3　遺物出土状況（南西から）

写真 15　溝 4　完掘（南から）

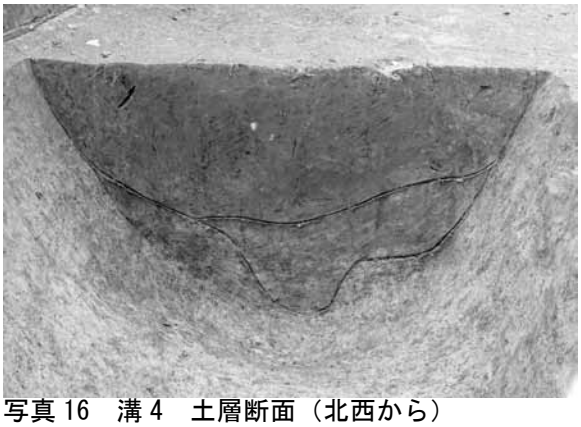


写真 16　溝 4　土層断面（北西から）

写真 17　溝 4　遺物出土状況（南から）

写真 18　水田跡 1　畦部分（北から）

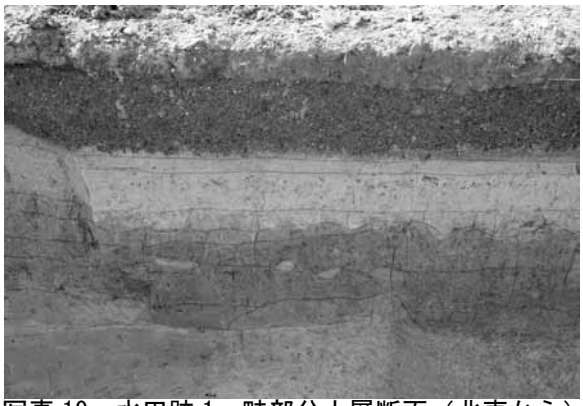


写真 19　水田跡 1　畦部分土層断面（北東から）

写真 20　溝 5　完掘（北から）

写真 21　溝 5（右）・16 号遺構（左）土層断面（北東から）

写真 22　溝 6　遺物出土状況（南西から）

写真 23　溝 7　完掘（南から）

図版 4

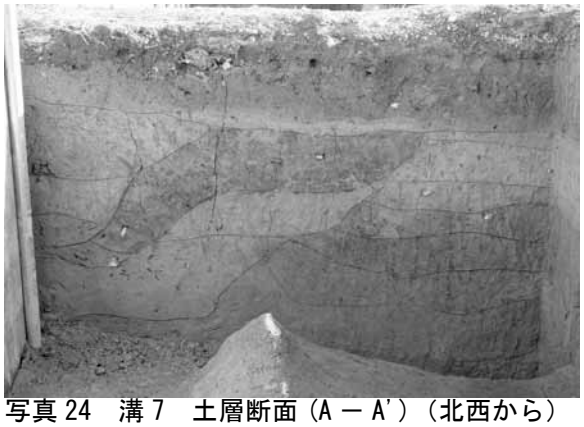


写真 24　溝 7　土層断面（A － A'）（北西から）

写真 25　溝 7　土層断面（B － B'）（北西から）

写真 26　基本層序（調査区北側部分）（北から）

写真 27　基本層序（調査区中央部分）（北から）

写真 28　下層確認（溝 6 南側）（北東から）

写真 29 下層確認（調査区南端）（北東から）

写真 30　作業風景(1)

写真 31　作業風景(2)

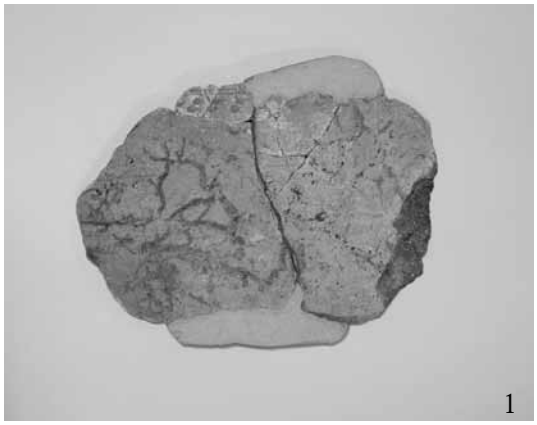
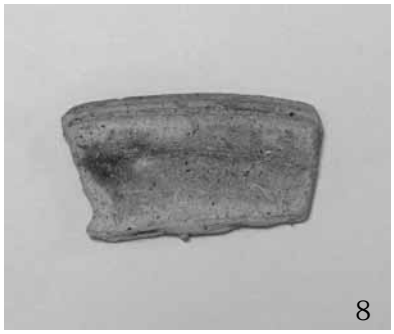
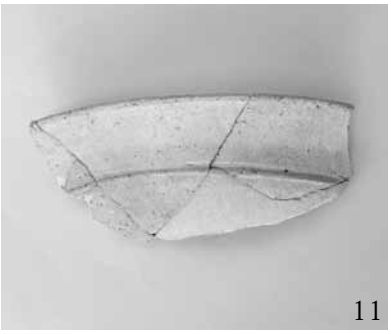
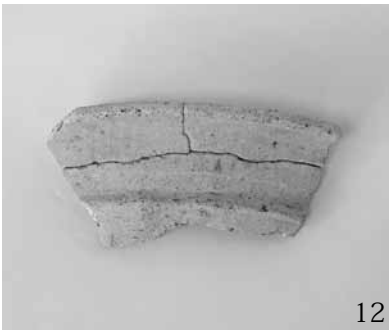


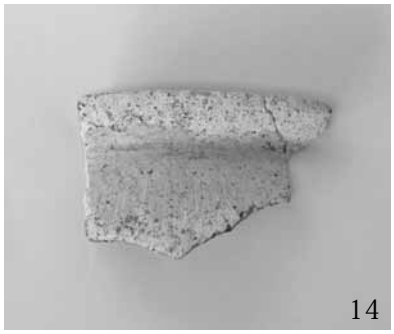
写真 32 実測遺物 1～7

図版 6









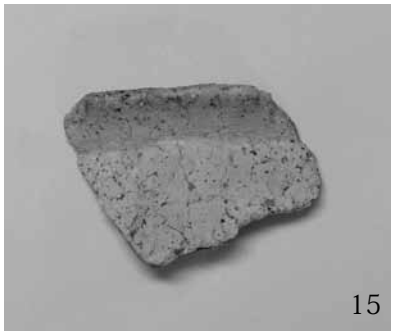
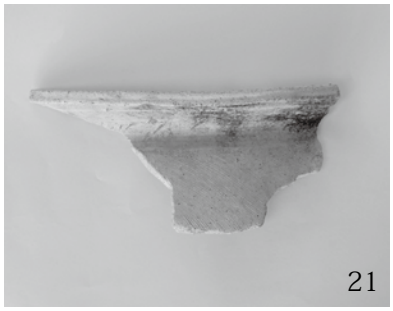
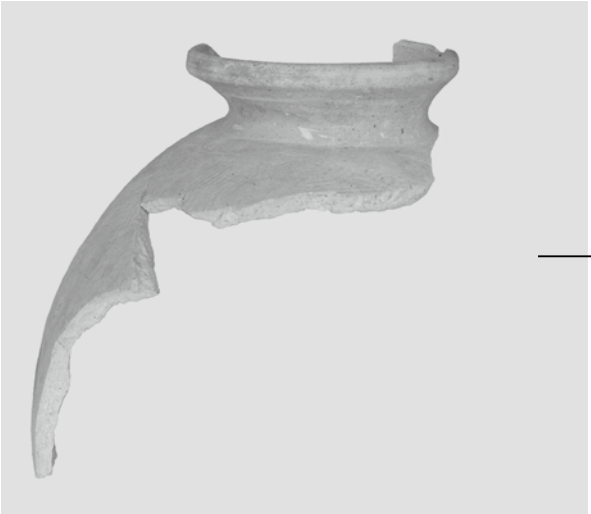


写真 33 実測遺物 8 ～ 17





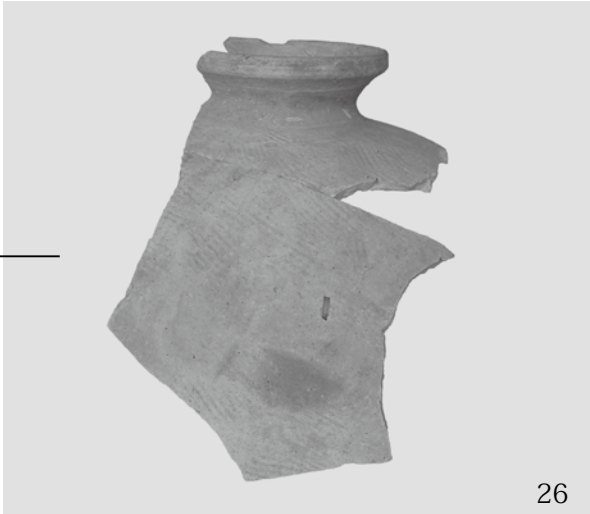


写真 34 実測遺物 18 ～ 24・26

図版 8

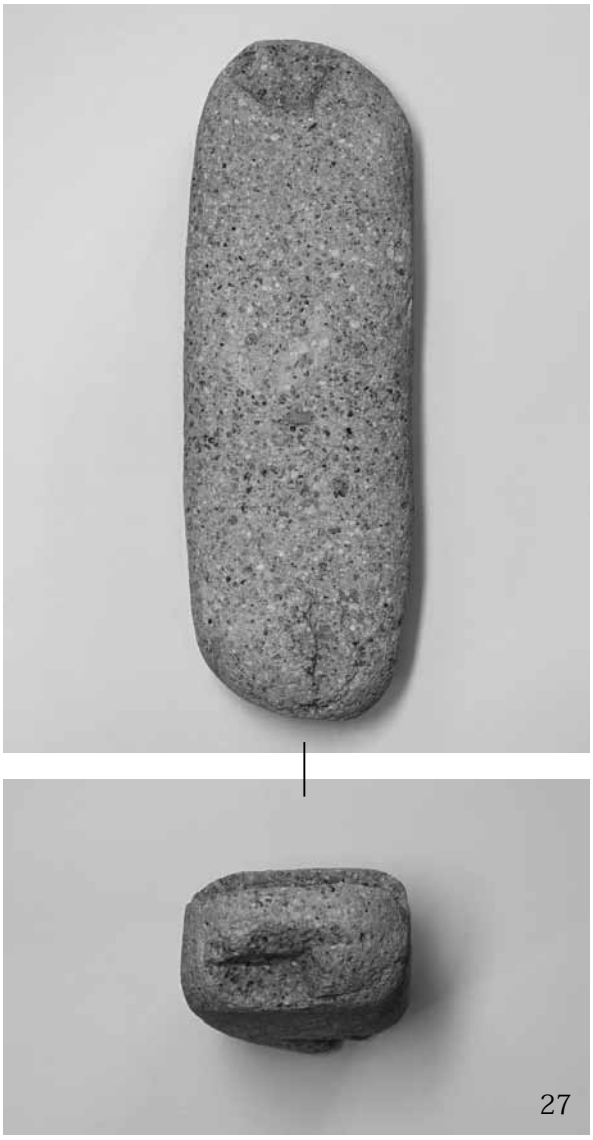


写真 35 実測遺物 25・27 ～ 30

報　告　書　抄　録

ふりがな	みぞのくちいせきはっくつちょうさほうこくしょ　さん
書　　名	溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅲ
副　書　名	
巻　　次	
シリーズ名	加古川市文化財調査報告
シリーズ番号	27
編 著 者 名	山中リュウ
編 集 機 関	加古川市教育委員会
所　在　地	〒675－0101　兵庫県加古川市平岡町新在家1224-7
発行年月日	2017年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
みぞのくち 溝之口 いせき 遺跡	かこがわし 加古川市 かこがわちょう 加古川町 みぞのくち 溝之口 ばん 37番２ほか	28210	110010	34° 45′ 56″	134° 50′ 58″	［発掘調査］ 2016年１月13日 ～２月８日 ［整理･報告書作成］ 2016年４月12日 ～2017年12月28日	120	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
溝之口 遺跡	集落	弥生時代 ～ 平安時代	溝状遺構　10 条 ピット　7 基 水田跡	弥生土器 土師器 須恵器 石器 鉄製品 その他	

要　　約	溝状遺構や水田跡などが検出され、弥生時代中期、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代後期、平安時代の４時期に区分できた。 水田跡は、部分的な検出に過ぎないものの２～３層に区分され、出土遺物や他の遺構との重複関係から、弥生時代中期から後期後葉にかけて営まれたと考えられ、上面には複数の足跡が残されていた。 溝状遺構は、各時期で検出され、このうち平安時代の溝はそれ以前の時期の溝とは軸線が大きく異なり、この地域における条里型地割に沿うものであることがわかった。
資料の 保管機関	加古川市教育委員会文化財調査研究センター 〒675-0101　兵庫県加古川市平岡町新在家1224-7

加古川市文化財調査報告　27

溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅲ

平成 29（2017）年 12 月 28 日

編集・発行　加古川市教育委員会
〒 675-0101　兵庫県加古川市平岡町新在家 1224-7
TEL 079-423-4088

印　　刷　富士高速印刷株式会社
〒 679-4232　兵庫県姫路市林田町上伊勢 692-3

加古川市文化財調査報告 27

溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅲ

2017

加古川市教育委員会